スズメ目 15 科を対象とした日本鳥類目録改訂第 7 版の学名と分類の検証—第 6 版および IOC リストとの相違—

浅井芝樹^{1,*}・岩見恭子¹・斉藤安行²・亀谷辰朗¹

¹ 公益財団法人山階鳥類研究所 〒270–1145 千葉県我孫子市高野山 115

² 我孫子市鳥の博物館 〒270–1145 千葉県我孫子市高野山 234–3

(2016 年 1 月 5 日受付；2016 年 6 月 4 日受理)

キーワード：日本鳥類目録改訂第 7 版，学名，命名法，分類，スズメ目。

日本鳥学会誌

Japanese Journal of
Ornithology

© The Ornithological Society
of Japan 2016

Shigeki ASAI^{1,*}, Yasuko IWAMI¹, Yasuyuki SAITOH², Tatsuki KAMEYA¹. A review of the scientific names and taxonomy for 15 families in the order Passeriformes adopted by the Check-List of Japanese Birds, 7th revised edition. Jpn J Ornithol 65: 105–128. (2016)

Abstract. The scientific names and taxonomy adopted by the Check-List of Japanese Birds 7th edition published in 2012 was reviewed for 154 taxa belonging to 15 families in the order Passeriformes, focusing on discrepancies from the 6th edition and the IOC World Bird List, mainly in light of the latest molecular phylogeny. Fifty taxa differed from the 6th edition and twenty-five taxa differed from the IOC list. Whereas the majority of the taxa in the 7th edition reflected the latest molecular phylogeny, some taxa in the Fringillidae and Corvidae did not. In the Fringillidae, *Carduelis spinus* should be moved to the genus *Spinus*, and *C. flammea* and *C. hornemanni* should be moved to the genus *Acanthis*. The range of *Corvus corone* is questionable, and the taxonomy of *Pica pica* and related taxa should be reconsidered. Molecular phylogenetic studies, published since the 7th edition, have advocated different names for Paridae and Fringillidae than those adopted by the 7th edition. It is advocated that *Poecile varius* should be moved to the genus *Sittiparus* and that two subspecies are elevated to full species. Both *Uragus sibiricus* and *Chaunoproctus ferreorostris* are to be moved to the genus *Carpodacus*. *Passer rutilans* should be renamed *Passer cinnamomeus* based on the Principle of Priority, although that is not a taxonomic subject. We were unable to give the correct spelling for *Artamus leucorhynchus* because of a loophole in the International Code of Zoological Nomenclature. In past editions of the check list of Japanese birds, many taxa have been considered to be junior synonyms and removed from the list, without sufficient scientific evidence. Therefore, the check list of Japanese birds may be revised on a large scale in the future.

Key words: Check-List of Japanese Birds, 7th revised edition, Scientific name, Nomenclature, Taxonomy, Passeriformes.

¹ Yamashina Institute for Ornithology, Konoyama 115, Abiko, Chiba 270–1145, Japan.

² Abiko City Museum of Birds, Konoyama 234–3, Abiko, Chiba 270–1145, Japan.

はじめに

2012 年 9 月に日本鳥類目録の改訂第 7 版（日本鳥学会 2012，以降「第 7 版」とする）が第 6 版

（日本鳥類目録編集委員会 2000，以降「第 6 版」とする）から 12 年ぶりに発行された。この第 7 版では近年の研究成果に基づいて分類が一新されたため（日本鳥学会 2012），第 6 版との違いが多数生じた一方，他のチェックリストとの違いは少なくなった。しかし第 7 版では，採用した分類の学術的根拠について一切説明がないため，第 6 版と

* E-mail: asai@yamashina.or.jp

doi:10.3838/jjo.65.105

JOI:JST.JSTAGE/jjo/65.105

異なっている理由に加えて、その他のチェックリストとの差がなお生じている理由もわからない。

第6版の編集過程では、分子系統学的手法に基づいた新しい分類システムは過渡期にあると判断され、分類については日本鳥類目録第5版 (Ornithological Society of Japan 1974) からの変更を最小限にとどめたとしている (日本鳥学会目録編集委員会 1997)。その一方、第7版では分子系統学的手法も合意が得られるようになったため、これらの研究成果を反映させたとしている (日本鳥学会 2012)。しかし上記の通り、根拠となった研究は明らかでない。

日本産スズメ目 37 科のうち任意の 15 科を取り上げると、第6版と第7版の間で1つ以上のタクソンで綴り、記載年の違いを含む学名の違いがあった科は10科になった (表1)。また、国際鳥類学者連合 (International Ornithologists' Union) の世界鳥類リスト (IOC World Bird List, Gill & Donsker 2015, 以降 IOC リストとする) と第7版を比較すると、1つ以上のタクソンで綴り、記載年の違いを含む学名の違いがあった科は6科となった (表1)。

そこで、本稿では第7版と第6版、および第7版と IOC リストとの間で学名や分類の違いがあっ

表1. 本稿で検証の対象とした科。それぞれの科の中で、日本鳥類目録改訂第7版が、第6版、および、国際鳥類学者連合の世界鳥類リスト v 5.3 との間で異なるタクソンを含むかどうかを示した。

Table 1. Families reviewed in this paper indicating whether taxa appearing in the Check-List of Japanese Birds 7th ed. differ from those in the 6th ed. or from the IOC World Bird List ver. 5.3.

	日本鳥類目録改訂第6版 Check-List of Japanese Birds 6th Revised Edition	IOC 世界の鳥類リスト v 5.3 IOC World Bird List v 5.3
モリツバメ科	あり	なし
Artamidae	yes	no
コウライウグイス科	なし	なし
Oriolidae	no	no
カササギヒタキ科	なし	なし
Monarchidae	no	no
カラス科	あり	あり
Corvidae	yes	yes
ツリスガラ科	なし	あり
Remizidae	no	yes
シジュウカラ科	あり	あり
Paridae	yes	yes
エナガ科	なし	あり
Aegithalidae	no	yes
メジロ科	あり	なし
Zosteropidae	yes	no
ゴジュウカラ科	あり	なし
Sittidae	yes	no
キバシリ科	あり	なし
Certhiidae	yes	no
ムクドリ科	あり	なし
Sturnidae	yes	no
スズメ科	あり	なし
Passeridae	yes	no
アトリ科	あり	あり
Fringillidae	yes	yes
ツメナガホオジロ科	なし	なし
Calcariidae	no	no
ホオジロ科	あり	あり
Emberizidae	yes	yes

た部分を取り上げ、それらがどのような研究成果を反映させたものかについて、特に分子系統学に焦点を当てて検証した。この際、学名に違いは無くとも、分類の採用の違いに基づく分布記載の違いについても言及した。さらに、学名の変遷に混乱があるものについて、チェックリスト間に違いがあるかどうかとは関係なく適宜解説した。

検討した種／亜種

本稿では、第7版のスズメ目に含まれる任意の15科76種(154タクサ)を扱った。すなわち、モリツバメ科、コウライウグイス科、カササギヒタキ科、カラス科、ツリスガラ科、シジュウカラ科、エナガ科、メジロ科、ゴジュウカラ科、キバシリ科、ムクドリ科、スズメ科、アトリ科、ツメナガホオジロ科、ホオジロ科である。このうち、コウライウグイス科、カササギヒタキ科、ツメナガホオジロ科については第6版、第7版、IOCリストの間に相違がなかった(表1)。

本文では、第7版での種／亜種掲載順で検証結果を示した。種名／亜種名には第7版における種番号／亜種番号を付記した。本稿の目的は、第7版の学名の妥当性を検証することなので、種和名の違いについては触れない。また、本稿では属、種、亜種の違いに限定して検討した。科レベル以上の高次分類については扱わない。例えば、メグロ *Apalopteron familiare* は第6版ではミツスイ科であり、第7版ではメジロ科であるが、この根拠については扱わなかった。

なお、本文中では原記載の表記について言及しているが、必ずしも原記載に忠実に学名を表記はしなかった。例えば、原記載では種小名の頭文字が大文字で書かれている場合もあるが、本文中では現在の国際動物命名規約第4版にしたがって小文字で表記した。

(1) モリツバメ科 Artamidae について

410. モリツバメ *Artamus leucorhynchus* (Linnaeus, 1771)

410-1. モリツバメ *Artamus leucorhynchus leucorhynchus* (Linnaeus, 1771)

第6版ではモリツバメの学名は *Artamus leucorhynchus* (Linnaeus, 1771) とされているが、第7版と IOC リストでは種小名が *leucorhynchus* とされている。主だったチェックリストでは *leucorhynchus* に統一されてきており(例えば、Dickinson 2003)、第7版ではこの趨勢にしたがっている。

モリツバメの原記載は1771年に発行された *Car. a Linné Mantissa plantarum: Generum editionis VI. et specierum editionis II* の524ページにあり、*Lanius leucorhynchus* と記載されている(原記載はイタリックになっていない)。リンネ以降の後綴りは *leucorhynchus*, *leucorhynchus*, *leucorhynchus*, *leucorhynchus*, *leucorhynchus*, *leucorhynchus* [chus] が見いだされるが(Mayr 1962)、どれが有効であるか議論された形跡は見つけられなかった。しかし、国際動物命名規約第4版には「ある不当な修正名が慣用されており、しかも原著者と日付に帰せられているならば、それを正当な修正名と見なすものとする」という条33.2.3.1が存在する。Rowley & Russell (2009) は、モリツバメについてはこの慣用法が適用されて *leucorhynchus* が用いられるとしている。

慣用法は「不当な修正名」を正当とみなすことであるが、正当な修正名が特定できるなら、それを用いるべきだろう。*leucorhynchus* が正当であるという根拠はないのだろうか。たくさんある後綴りのいくつかは単なる誤記であるかもしれないが、現在有効とされている *leucorhynchus* が正しく修正されていると主張するならば、国際動物命名規約第4版の条32.5にしたがって、リンネが *leucorhynchus* より長い名前を意図しており、かつそれが *-chos* などではなく、*-chus* であるという証拠が必要である(Peterson 2013)。原記載では最後にドットが付いているが、リンネが種小名を省略して書いたという証拠はなく、同じ文献に記載されたその他の種名を見ると、種小名の後のドットの有無や、属名との間のスペースの有無が一貫しておらず、*Lanius leucorhynchus* に関するそれ以上の記載はない。したがって、「*leucorhynchus*」は訂正しなければならない綴りにはあたらない、すなわち *leucorhynchus* は正当ではなく、*leucorhynchus* が用いられるべきであるという議論もある(Peterson 2013; David & Dickinson 2014)。

一方、*leucorhynchus* は「不当な修正名」であるため、慣用法にしたがって使用するとしても、実際にはごく近年でも *leucorhynchus* を用いた文献が見い出され、*leucorhynchus* の方が圧倒的にたくさん使用されているということはない。

「慣用されている」ということの定義は、実ははっきりしていない。命名規約では、条33.2.3.1の適用を論文等で宣言するよう求めているので、不当な修正名が、いつ正当な修正名とみなされたのかを特定できない。したがって、いったん条33.2.3.1が適用されたように見えても、別の学名が

登場して条 33.2.3.1 の適用を受ける可能性もある (大久保 2006). つまり, 国際動物命名規約第 4 版では, モリツバメの学名がいつ確定したのか述べることはできない. モリツバメの学名に生じた混乱は国際動物命名規約の不備が招いた問題と思われる. 以上から, モリツバメの種小名について, 第 7 版の妥当性は不明と考えられる.

(2) カラス科 Corvidae について

427. カケス *Garrulus glandarius* (Linnaeus, 1758)

カケスは, 多くの亜種に分けられているが, Dickinson (2003), Clements (2007), IOC リストではそれぞれ, 35 亜種, 40 亜種, 34 亜種と見解が異なり, 分類について未解明の部分が多い. 日本に生息する亜種に限定すると, Dickinson (2003), Clements (2007), IOC リストでそれぞれ 5 亜種, 6 亜種, 5 亜種となる. Clements (2007) は *G. g. bambergi* (北海道のミヤマカケス) を認めているが, Dickinson (2003) は *G. g. bambergi* は *G. g. brandtii* のジュニアシノニムだとして認めていない. また, Clements (2007) は *G. g. namiyei* (対馬) を認めているが, Dickinson (2003) はこれを *G. g. japonicus* (本州に広く分布) のジュニアシノニムだとしている. また, IOC リストは Dickinson (2003) と同じ亜種を認めている. 一方, 第 7 版は第 6 版を踏襲して *G. g. namiyei* を認めず, Dickinson (2003) と IOC リストが認めている *G. g. hiugaensis* (九州南部) も認めておらず, 日本産を 4 亜種としている. このように, 北海道のミヤマカケスを除く本州以南の亜種はチェックリスト間で異なる. この経緯を日本鳥類目録の改訂過程を中心に述べると下記ようになる (以下, 北海道のミヤマカケスと台湾のタカサゴカケス *G. g. taivanus* については割愛する).

Garrulus glandarius japonicus Temminck & Schlegel, 1847 が記載された後, 日本鳥学会が 1922 年に出版した日本鳥類目録では, 本州以南に分布する亜種は対馬に生息する *G. g. namiyei* Kuroda, 1922 とそれ以外の地域に分布する *japonicus* のみとされた (日本鳥学会 1922). 改訂日本鳥類目録が出版される 1932 年までの間に, 屋久島を基産地とする *G. g. orii* Kuroda, 1923, 岩手を基産地とする *G. japonicus kakes* Momiyama, 1927, 土佐 (高知県) を基産地とする *G. j. nakaokae* Momiyama, 1927, 日向 (宮崎県) を基産地とする *G. j. hiugaensis* Momiyama, 1927, 佐渡島を基産地とする *G. g. tokugawae* Taka-Tsukasa, 1931 が新たに記載された

ものの, 改訂日本鳥類目録では, *kakes* と *nakaokae* は *japonicus* のジュニアシノニムとされた (日本鳥学会 1932). しかし, この 2 亜種が *japonicus* のジュニアシノニムとした研究論文を 1927 年から 1932 年の間に見つけることはできなかった. また, 改訂日本鳥類目録では, *hiugaensis* の分布について Hondo (Shimoda) という記述が見られる. これは伊豆半島の下田を表していると思われるが, 原記載である 1927 年では分布を九州南部としているだけで, 本州の分布について何も述べていない (1927) では, 九州北部には *nakaokae* が分布するとしている). *hiugaensis* の分布について記された論文は, 原記載以外に 1927 年から 1932 年の間に見つけることはできなかった. 一方, 改訂日本鳥類目録の発行の後に, *G. japonicus shimoizumii* Momiyama, 1939 という亜種が新しく記載され, この基産地が Shimoda の近くの Inôzawa-mura とされた (Momiyama 1939). そして, この亜種は日本鳥類目録第 3 版で *hiugaensis* のジュニアシノニムとされたのである (日本鳥学会 1942). つまり, 改訂日本鳥類目録は *hiugaensis* のシノニムとされるであろう新亜種の発表を見越していたように見える. これ以降, *hiugaensis* は九州南部と伊豆半島という飛び地分布をするようにみなされた (Ornithological Society of Japan 1974; Clements 2007). ただし, *hiugaensis* の分布を九州のみとしたチェックリストもある (Dickinson 2003). しかしいずれにせよ, *shimoizumii* が *hiugaensis* のシノニムである根拠を示した研究論文は未だ見つけることができていない. この後, 第 6 版で *hiugaensis* は *japonicus* のジュニアシノニムとされた. この根拠として, 熊本, 宮崎, 鹿児島各県から採集された 6 標本を本州産の *japonicus* と比較したところ, 1927) に示された後頭部や背部の色の違いは見いだされなかったとしている (Morioka 2000). しかし残念ながら, どの標本を比較したのかは書かれていない.

hiugaensis の記載では *japonicus* のタイプ標本と直接比較をしたわけではない (Dickinson et al. 2004). *japonicus* の標本を入手したのはシーボルトであり, 彼は長崎にいたのであるから九州産のカケスの標本を手に入れた可能性が高く, 実際にオランダ国立自然史博物館にある *japonicus* の 3 つのシタイプはいずれも “Kioe Sioe” (=九州) というラベルが付いている (Dickinson et al. 2004). したがって Dickinson et al. (2004) は, タイプ標本と九州北部産, 九州南部産を比較して, *japoni-*

cus の産地が厳密にわかるまでは、*hiugaensis* の産地を *japonicus* と同じに扱うのがよいとしている。また、*kakes* は *hiugaensis* と同時に記載されており、やはりタイプ標本と比較されていない。Dickinson et al. (2004) は *japonicus* の基産地が曖昧なため、*kakes* については棚上げにしたほうがよいと薦めている。確かに、タイプ標本と比較していないということは大きな問題だろう。しかし、初山 (1927) はシーボルトの標本が九州北部産に偏っているだろうことは認識しており、その上で九州南部産 (*hiugaensis*) と北部産 (*nakaokae*) の違い、あるいは岩手産 (*kakes*) と四国産 (*nakaokae*) の違いを論じている。また、Dickinson et al. (2004) は長崎が九州南部であると誤認している。初山 (1927) が述べている九州南部とは、熊本、宮崎のことである。根拠不明であるが日本鳥学会 (1932) では鹿児島も含めている。

一方、日本鳥類目録第4版までは亜種として認められた *namiyei* であるが (日本鳥類目録第4版編集委員 1958)、第5版では *japonicus* のジュニアシノニムとなっている。Dickinson (2003) の見解はこの見解と同じだが、その根拠は Vaurie (1959) によると脚注に記している。確かに Vaurie (1959) では *namiyei* を *japonicus* のジュニアシノニムとしているが、根拠は書かれていない。

以上のように、本州から九州にかけて多くの亜種が記載された後、多くが *japonicus* のシノニムとされた。しかし、第6版、第7版、IOC リストのいずれも学術的裏付けが不明で、筆者らは明確なデータに基づき学術的に検討された結果なのかどうかは確認できなかった。

427-2. カケス *Garrulus glandarius japonicus* Temminck & Schlegel, 1847

第6版では記載年を 1848 年としているが、第7版と IOC リストでは 1847 年としている。亜種カケスは日本動物誌 (Fauna Japonica) の鳥類編 83 ページ、図版 43 に記載されている (Morioka et al. 2005)。本文 83 ページが 1848 年に発行されたことはほぼ確実であるが、図版が本文に先立って 1847 年 7 月発行の分冊 3 で発表されており (Holthuis & Sakai 1970)、第7版と IOC リストの方が正しい。

429. オナガ *Cyanopica cyanus* (Pallas, 1776)

オナガは東西に隔離した 2 個体群があり、2 亜種 (*C. c. gili* は *C. c. cooki* のシノニムとされることが多い) はイベリア半島、他の 7 亜種は東アジア

(モンゴルから日本まで、南は中国中西部まで) に大きく分かれて分布しているとされていた (例えば、Madge & Burn 1994)。第6版ではこの見解を採用しているようで、分布の記載で東西に隔離された個体群があるとしている。

一方、Kryukov et al. (2004) は、形態比較とミトコンドリア DNA 調節領域に基づいた分子系統学的分析を行い、東西の個体群が形態的にも遺伝的にも完全に分離されることを示し、別種とした。この場合、日本に分布する種は *Cyanopica cyanus* となる。第7版と IOC リストでは東西の個体群を別種とみなし、オナガの分布をモンゴル以東としている。

第6版では種小名が *cyana* となっていたが、第7版と IOC リストでは *cyanus* となっている。オナガの原記載は *Corvus cyanus* Pallas, 1776 であるが、*cyanus* はラテン語の「青い」を意味する形容詞と誤解されて、属名が *Cyanopica* と変更になった際に女性名詞と性を一致させるべく *cyana* とされることが多かった (国際動物命名規約第4版、条 31.2 から)。しかし、実際には「青いもの」を意味するギリシャ語名詞がラテン語化されたものである。ラテン語化された名詞は形容詞のように語尾が変化することはないので (国際動物命名規約第4版、条 31.2.1)、属名が女性形の名詞に変わっても種小名が変化することはない、*cyanus* が正しい (David & Gosselin 2002)。

429-1. オナガ *Cyanopica cyanus japonica* Parrot, 1905

第6版では種小名が *cyana* とされているが、種オナガの説明の通り、第7版と IOC リストに記された *cyanus* が正しい。

430. カササギ *Pica pica* (Linnaeus, 1758)

第6版ではユーラシアの分布に加えて、北アメリカ西部に生息するとしている。これは *hudsonia* か *nutalli* (*nuttalli* としているリストが多いが原記載は *nutalli* であり、訂正しなければならない原綴りであるという内部証拠がないため *nutalli* のままとするのが正しい; David & Dickinson 2014) のどちらか、あるいは両方をカササギの亜種として扱っていることになるが、記述からは正確なことはわからない。多くのチェックリストでは形態の違いにより、これら 2 つのタクサはそれぞれカササギとは別種扱いされている (American Ornithologists' Union 2000; Dickinson 2003; Clements 2007; Parkin & Knox 2010; Dickinson & Christidis 2014)。

第7版では世界分布の記述から北アメリカが削除されているため、*hudsonia* と *nutalli* を別種としていたことがわかる。また、IOC リストも *hudsonia* と *nutalli* を別種扱いしている（ただし誤って *nutalli* と綴っている）。

Zink et al. (1995) は、*hudsonia* や *nutalli* などの北アメリカ個体群がカササギと同種と扱われていた時期にも、ベーリング海に遺伝的な境界があることを示した。一方、ミトコンドリア DNA の 16s rDNA から ND1 までの 813bp から分子系統樹を作成した研究では、*P. hudsonia* と *P. nutalli* はカササギのヨーロッパの亜種 *P. pica pica* とカムチャツカの亜種 *P. pica camtschatica* からなる系統の姉妹群となった (Lee et al. 2003)。しかし、この分子系統樹によると日本を含む東アジアの亜種 *P. pica serica* (Lee et al. 2003 と第6版では *P. p. sericea* となっているが、これは後述の通り誤りである) は分岐が古く、*P. p. pica*, *P. p. camtschatica*, *hudsonia*, *nutalli* からなる系統の姉妹群となる。よって、Lee et al. (2003) は *hudsonia* と *nutalli* をカササギの亜種とすべきであると主張している。

Lee et al. (2003) の主張に従えば、カササギの分布は改めて新北區まで拡大することになる。あるいは、東アジアの個体群だけがその他の亜種から分けられて別種扱いされるかもしれない。したがって第6版の分布記載の方が妥当と考えられるが、今後の系統学的研究によって第7版や IOC リストの分布記載よりさらに小さな分布域となるかもしれない。

430-1. カササギ *Pica pica serica* Gould, 1845

日本に生息するカササギの亜種は、第6版では *P. p. sericea* とされたが、この亜種の名の綴りは *P. p. serica* である (Blake & Vaurie 1962)。Blake & Vaurie (1962) は、*sericea* の綴りは訂正されるべきと考えているらしく、*sericea* を採用しているが、その根拠には触れていない。多くの文献で *P. p. sericea* とされているが、根拠は示されていない (Peterson 2013)。David & Dickinson (2014) によれば、*serica* はギリシャ語形容詞で「絹の」を表す *serikos* を正しくラテン語化したものである。したがって、第7版と IOC リストの通り、*Pica pica serica* と綴るべきである (Madge 2009)。

433. コクマルガラス *Corvus dauuricus* Pallas, 1776

コクマルガラスは第6版と第7版で *Corvus dauuricus* とされたが、IOC リストでは *Coloeus*

dauuricus とされている。IOC リストが *Coloeus* を採用する根拠をたどると Krykov & Suzuki (2000) であることがわかるが、この研究ではおもにハシボソガラス *Corvus corone* とハシブトガラス *C. macrorhynchos* を扱い、解読した DNA 配列も 336bp だけであったので、IOC リストの根拠は薄弱と思われる。これ以外に、Haring et al. (2007) が *Corvus* の系統関係についてミトコンドリア DNA の調節領域 690bp を用いて検証しており、コクマルガラスとニシコクマルガラス *C. monedula* からなるクレードが、その他の *Corvus* から最初に分岐したことを示している。根拠としてはこちらの方が強いと思われるが、その他の *Corvus* としてハシボソガラス、ワタリガラス *C. corax*、ミヤマガラス *C. frugilegus* しか扱っていない。したがって、この時点ではコクマルガラスを *Coloeus* とする強い根拠がなかったと言える。

2012年8月に出版された Haring et al. (2012) では、*Corvus* に含まれる 34 種を対象に調節領域の 650bp で分析を行い、やはりコクマルガラスとニシコクマルガラスからなるクレードがもっとも古い分岐となった。その他の *Corvus* との遺伝距離は 13~16% 程度と大きい (p-distance)。Haring et al. (2012) では、属名の変更などについて特に言及はしていない。

435. ハシボソガラス *Corvus corone* Linnaeus, 1758

ハシボソガラスは5ないし6亜種が認められてきたが (Madge & Burn 1994; Dickinson 2003)、このうち全身が黒い *corone* グループと、黒色を基調としながら後頸から上背、および腹が灰白色の *cornix* グループに分けられている。これらのグループは色彩について明確な差異がありながら、分布境界で交雑しているため同種の別亜種とされてきた (Madge & Burn 1994)。しかし、近年の研究では、*corone* グループと *cornix* グループの生息場所の選好性が異なること、交雑個体の繁殖成功率が低いことなどから、別種との見方が趨勢となった (Parkin et al. 2003)。

corone グループと *cornix* グループの両グループを含む分布は、西ヨーロッパからカムチャツカ半島にまでおよび、北は北極圏付近、南は地中海地方から小アジア、コーカサス、イランを通過して天山山脈、中国は青海省から河北省にかけて分布する。このうち、*cornix* グループの分布範囲は、アイルランドとスコットランド北部、スカンジナビア半島と東欧諸国、イタリア、小アジアからコー

カサス、イランで、ロシアではエニセイ川以西である。つまり、*corone* グループは西ヨーロッパとエニセイ川以東のアジア地域とに大きく分断される。第6版では、ハシボソガラスがユーラシア全体に分布するように表記されているが、第7版では西ヨーロッパと中央アジア以東と書かれているため、*corone* グループと *cornix* グループを別種とみなしているとわかる。また、IOC リストも同様である。しかし、*cornix* グループが別種とすれば、*corone* グループも東西の個体群間で遺伝的分化が大きい可能性があり、分子系統学的研究が進めば、ハシボソガラス *Corvus corone* は更に細分化される可能性があると考えられた (Parkin et al. 2003)。この見解では、第7版や IOC リストのように両グループを別種として扱うのが妥当であった。しかし、ミトコンドリア DNA の調節領域 690bp を用いた研究で、ハシボソガラスは遺伝的に2つのグループに分かれ、一方はカムチャツカ、アムール、サハリン、日本といった極東だけに分布するが、もう一方は西ヨーロッパからカムチャツカに至る広い範囲に分布することが明らかとなった (Haring et al. 2007)。つまり、*corone* グループと *cornix* グループのように色彩と一致した分化をしていない。ただし、これらの分子系統学を反映した分類はいまだ提唱されていない。

第7版が出版された後、チトクローム *b* 領域全体と調節領域 650bp を用いた研究で Haring et al. (2007) と同様の結果が得られた (Haring et al. 2012; Kryukov et al. 2012)。

(3) ツリスガラ科 Remizidae について

439. ツリスガラ *Remiz pendulinus* (Linnaeus, 1758)

ツリスガラは *pendulinus* グループ、*macronyx* グループ、*coronatus* グループ、*consobrinus* グループの4つに分けることが多く、この根拠として巣の作りや形態の違いが挙げられているが (Eck & Martens 2006)、分子系統学的研究はまだ行われていない。

第7版はツリスガラについて第6版を踏襲しているが、IOC リストでは、第7版で亜種とされた *consobrinus* を別種として扱っている。IOC リストは、その根拠として Eck & Martens (2006) を引用しているが、Eck & Martens (2006) は別種扱いしていない。IOC リストの根拠は現状では不明である。

(4) シジウカラ科 Paridae について

440. ハシブトガラ *Poecile palustris* (Linnaeus, 1758)

Gill et al. (2005) によると、*Parus* の39種とヒメサバクガラス *Pseudopodoces humilis*、サルタンガラ *Melanochlora sultanea*、キマユガラ *Sylviparus modestus* を含む42種についてミトコンドリア DNA のチトクローム *b* 領域から系統樹を構築したところ、外群に対してこれらは単系統となった。このグループ内の配列の差はおよそ12%におよび、6つの群が単系統と認められたため、*Poecile*、*Baeolophus*、*Lophophanes*、*Periparus*、*Parus*、*Cyanistes* という亜属名を属名へ昇格させることが提唱された。この再構築された系統樹において、ハシブトガラはヤマガラ *Poecile varius* と共に *Poecile* に含まれている。

第6版でハシブトガラは *Parus* であったが、第7版と IOC リストでは *Poecile* となっており、分子系統学に基づいた知見を反映している。

一方、2013年になってさらにこの分類が見直され、シジウカラ科に属すると考えられる56種すべてについて、核 DNA の2遺伝子 (ミオグロビン、オルニチンデカルボキシラーゼ)、およびミトコンドリア DNA の ND2 領域の塩基配列が調べられた (Johansson et al. 2013)。この結果、シジウカラ科の単系統性は強く支持され、*Parus* を含むグループと *Poecile*、*Periparus* を含むグループに大きく分かれた。この研究では14属 (*Cephalopyrus*、*Sylviparus*、*Melanochlora*、*Periparus*、*Pardaliparus*、*Lophophanes*、*Baeolophus*、*Sittiparus*、*Poecile*、*Cyanistes*、*Pseudopodoces*、*Parus*、*Machlolophus*、*Melaniparus*) が提唱され、ハシブトガラは *Poecile* に含まれている。

440-1. ハシブトガラ *Poecile palustris hensoni* (Stejneger, 1892)

種ハシブトガラでの説明の通り、第7版と IOC リストは Gill et al. (2005)、あるいは Johansson et al. (2013) によって提唱された分類と一致しており、*Poecile* としている。

441. コガラ *Poecile montanus* (Conrad von Baldenstein, 1827)

コガラは第6版では *Parus* であったが、第7版と IOC リストでは *Poecile* とされた。コガラは Gill et al. (2005)、および Johansson et al. (2013) でハ

シブトガラと同属の *Poecile* とされ、これが反映されたものと考えられる。

第6版と第7版では、コガラの分布は中国の四川省、雲南省におよぶとしているため、中国に生息する亜種 *P. m. songarus*, *P. m. weigoldicus*, *P. m. affinis*, *P. m. stotzneri* を同種扱いしていると考えられる。しかし、これらをまとめて別種扱いする場合もある (Harrap & Quinn 1996; Dickinson 2003; Clements 2007)。ミトコンドリア DNA のチトクローム *b* 領域を調べた研究では、*affinis* と *songarus* がそれぞれ単系統であることが示されたものの、残りの亜種との遺伝距離が短く、種として認められる程度ではなかった (Kvist et al. 2001; Salzburger et al. 2002)。一方、*weigoldicus* はその他の亜種と遺伝距離が4.6%以上と大きく、別種相当と考えられた (Salzburger et al. 2002)。IOC リストと David & Dickinson (2014) では、この結果を反映して *Poecile weigoldicus* とコガラを別種に分けているが、第7版はこれらの研究を反映していない。

属名の語尾が *-e* であることから、*Poecile* はラテン語の女性名詞とみなされ、種小名を *montana* としている文献があるが、*Poecile* はギリシャ語の男性形容詞に由来しており、*montanus* と綴るのが正しい (David & Gosselin 2012)。

441-1. カラフトコガラ *Poecile montanus sachalinensis* (Lönnerberg, 1908)

種コガラでの説明の通り、第7版と IOC リストは Gill et al. (2005)、あるいは Johansson et al. (2013) によって提唱された分類と一致しており、*Poecile* としている。

441-2. コガラ *Poecile montanus restrictus* (Hellmayr, 1900)

種コガラでの説明の通り、第7版と IOC リストは Gill et al. (2005)、あるいは Johansson et al. (2013) によって提唱された分類と一致しており、*Poecile* としている。

また、*Poecile* はギリシャ語の男性形容詞に由来しているため、亜種小名の綴りは *restricta* ではなく、*restrictus* が正しい (David & Gosselin 2012)。

442. ヤマガラ *Poecile varius* (Temminck & Schlegel, 1845)

442-1. ヤマガラ *Poecile varius varius* (Temminck & Schlegel, 1845)

ヤマガラは第6版では *Parus* であったが、第7

版では *Poecile* とされた。これは No. 440 のハシブトガラで説明したとおり、Gill et al. (2005) に対応したものと考えられる。

前出の Johansson et al. (2013) では、シロビタイガラ *Sittiparus semilarvatus* と単系統をなし、*Sittiparus varius* となっているが、*Sittiparus* は *Poecile* の姉妹群であり、両者を合わせて単系統をなしている。Johansson et al. (2013) は、*Sittiparus* を *Poecile* と分ける根拠として、シジュウカラ科の中でこの2種だけが額が白く、比較的嘴が長いことを挙げている。IOC リストはこの研究を反映して、ヤマガラを *Sittiparus varius* としている。

また、第6版では記載年を1848年としているが、第7版と IOC リストでは1845年としている。亜種ヤマガラは日本動物誌の鳥類編 71 ページ、図版 35 に記載されており (Morioka et al. 2005)、本文は1847年に出版された分冊4か、それ以降に掲載されているが、これに先行して図版 35 を含む分冊2が1845年に出版されている (Holthuis & Sakai 1970)。したがって第7版と IOC リストの方が正しい。

442-2. ナミエヤマガラ *Poecile varius namiyei* (Kuroda, 1918)

種ヤマガラでの説明の通り、第7版は Gill et al. (2005) によって提唱された分類に対応して *Poecile* としており、IOC リストは Johansson et al. (2013) に従って *Sittiparus* としている。

442-3. オーストンヤマガラ *Poecile varius owstoni* (Ijima, 1893)

種ヤマガラでの説明の通り、第7版は Gill et al. (2005) によって提唱された分類に対応して *Poecile* としている。

McKay et al. (2014) は、日本以外に生息する亜種も含めたヤマガラ全9亜種について、色彩を含む形態データと分子データ (ミトコンドリア DNA の ND2 と核 DNA) を分析し、*owstoni* を別種と位置づけた。IOC リストでは、Johansson et al. (2013) と McKay et al. (2014) に基づいてオーストンヤマガラを *Sittiparus owstoni* としている。

442-4. ダイトウヤマガラ *Poecile varius orii* (Kuroda, 1923)

種ヤマガラでの説明の通り、第7版は Gill et al. (2005) によって提唱された分類に対応して *Poecile* としており、IOC リストは Johansson et

al. (2013) に従って *Sittiparus* としている.

442-5. タネヤマガラ *Poecile varius sunsunpi* (Kuroda, 1919)

種ヤマガラでの説明の通り, 第7版は Gill et al. (2005) によって提唱された分類に対応して *Poecile* としており, IOC リストは Johansson et al. (2013) に従って *Sittiparus* としている.

442-6. ヤクシマヤマガラ *Poecile varius yakushimensis* (Kuroda, 1919)

種ヤマガラでの説明の通り, 第7版は Gill et al. (2005) によって提唱された分類に対応して *Poecile* としているが, IOC リスト, および Dickinson (2003), Dickinson & Christidis (2014) は *yakushimensis* を *sunsunpi* のシノニムとしている. この根拠については特に記していないが, おそらく Snow (1967) に基づくと思われる. Vaurie (1957) には, David Snow による補足説明があるが, この中で Snow は Vaurie の見解に従うが, *yakushimensis* については *sunsunpi* のシノニムとして扱いたいとしており, これが Snow (1967) に反映されたものと思われる. 一方, Eck & Martens (2006) の脚注によると, 第6版の補遺は *yakushimensis* も *sunsunpi* も *varius* のシノニムであることを暗示しているが, 補遺の執筆者である森岡が *sunsunpi* の標本を見たことがなく, 調べた標本が少ないため (Morioka 2000), 第6版の本文中では *yakushimensis* が *sunsunpi* のシノニムとする見解が採用されなかったと説明している. Morioka (2000) を確認すると, 確かに *sunsunpi* の標本を見たことがないこと, *yakushimensis* の標本は本州で採集された *varius* と区別がつかなかったこと, が記されている. しかし森岡 (1976) には, 少ないながらも種子島産2個体, 屋久島産4個体を本州, 四国, 九州産と比較した結果が記されており, 屋久島産はむしろ九州産や四国産と区別できると書かれている. また同時に, 種子島産は基亜種と区別できるかどうか疑問であるとしている. この2つの文献の著者は同一人物だが, この見解は明らかに矛盾しているように見える. *yakushimensis* の扱いについては明らかに混乱が見られる. McKay et al. (2014) は *castaneoventris*, *olivaceus*, *owstoni* を別種としたものの, 亜種の有効性については言及していない.

442-7. アマミヤマガラ *Poecile varius amamii* (Kuroda, 1922)

種ヤマガラでの説明の通り, 第7版は Gill et al. (2005) によって提唱された分類に対応して *Poecile* としており, IOC リストは Johansson et al. (2013) に従って *Sittiparus* としている.

442-8. オリヤマガラ *Poecile varius olivaceus* (Kuroda, 1923)

種ヤマガラでの説明の通り, 第7版は Gill et al. (2005) によって提唱された分類に対応して *Poecile* としている.

McKay et al. (2014) による色彩を含む形態データと分子データを組み合わせた解析では, *olivaceus* は別種と位置づけられた. IOC リストでは, Johansson et al. (2013) と McKay et al. (2014) に基づいてオリヤマガラを *Sittiparus olivaceus* としている.

443. ヒガラ *Periparus ater* (Linnaeus, 1758)

ヒガラは第6版では *Parus* であったが, 第7版と IOC リストでは *Periparus* とされた. 第7版の場合, No. 440 のハシブトガラの項で説明した通り, Gill et al. (2005) に対応したものと考えられる. また, IOC リストが準拠している Johansson et al. (2013) においても *Periparus* が提唱されている.

443-1. ヒガラ *Periparus ater insularis* (Hellmayr, 1902)

種ヒガラでの説明の通り, 第7版では Gill et al. (2005) によって提唱された分類に対応して, IOC リストでは Johansson et al. (2013) に対応して, *Periparus* とされている.

445. シジュウカラ *Parus minor* Temminck & Schlegel, 1848

445-1. シジュウカラ *Parus minor minor* Temminck & Schlegel, 1848

第6版はシジュウカラの学名を *Parus major* としていた. 第6版が認めた *Parus major* は, 以前からいくつかの種に分かれることが示唆されていた (Harrap & Quinn 1996; Eck & Martens 2006 など).

ミトコンドリアDNAの調節領域を用いた分子系統学的研究によると *Parus major* は *major*, *minor*, *bokharensis*, *cinereus* の4グループに分けられ, 遺

伝距離では種間に相当する程度に分かれているが、交雑帯が存在するため生物学的種概念によって同種と判断された (Kvist et al. 2003). 日本に生息する亜種, *minor*, *amamiensis*, *okinawae*, *nigriloris* はすべて *minor* グループに含まれる (Harrap & Quinn 1996; ただし Brazil 2009 では *nigriloris* を *cinereus* グループに含めている).

Päckert et al. (2005) は, ミトコンドリア DNA チトクローム *b* 領域の分子系統学的解析を行い, *major* は *bokharensis* を含んで単系統性を示し, *minor* と *cinereus* はそれぞれ単系統であることを示した. さらに, アムールにおける *major* グループと *minor* グループの交雑帯で形態と音声調べた結果, 交雑は非常に限定されたものであり, *major* と *minor* は別種であると結論づけた. 第7版と IOC リストではシジュウカラを *Parus minor* としているが, この研究を反映したものと考えられる. *P. minor* とする場合, その分布域は中国南西部から北東部, およびアムール川流域と朝鮮半島, 日本となる.

一方, Johansson et al. (2013) では *major*, *minor*, *bokharensis*, *cinereus* は一つのクレードとなっているが, サンプル数が1つずつなので, これらの亜種を種に昇格するべきかどうかについて議論ができない.

Dickinson & Christidis (2014) は, Eck & Martens (2006) と Päckert & Martens (2008) に基づいて, かつて *P. major* とされたものを *P. major*, *P. bokharensis*, *P. cinereus* の3種に分け, *minor* グループは *P. cinereus* に含めたとしているが, 引用した2文献にはこのようなことは主張されておらず, 根拠は不明である.

445-2. アマミシジュウカラ *Parus minor amamiensis* Kleinschmidt, 1922

種シジュウカラでの説明の通り, 第7版と IOC リストは Päckert et al. (2005) によって提唱された分類と一致しており, *Parus minor* としている.

445-3. オキナワシジュウカラ *Parus minor okinawae* Hartert, 1905

種シジュウカラでの説明の通り, 第7版と IOC リストは Päckert et al. (2005) によって提唱された分類と一致しており, *Parus minor* としている.

445-4. イシガキシジュウカラ *Parus minor nigriloris* Hellmayr, 1900

種シジュウカラでの説明の通り, 第7版と IOC リストは Päckert et al. (2005) によって提唱された分類と一致しており, *Parus minor* としている.

446. ルリガラ *Cyanistes cyanus* (Pallas, 1770)

ルリガラは第6版では *Parus* であったが, 第7版と IOC リストでは *Cyanistes* とされた. 第7版はハシブトガラ, コガラ, ヤマガラ, ヒガラと同様に Gill et al. (2005) に対応したものと考えられる. また, IOC リストは Johansson et al. (2013) に対応したものと考えられるが, Johansson et al. (2013) でも *Cyanistes* が提唱されている.

446-1. ルリガラ *Cyanistes cyanus tianschanicus* Menzbier, 1884

種ルリガラの説明の通り, 第7版と IOC リストでは Gill et al. (2005), あるいは Johansson et al. (2013) によって提唱された分類と一致しており, *Cyanistes* としている.

Cyanistes cyanus tianschanicus は Menzbier によって 1884 年に記載されており (ただし, Menzbier は *Cyanistes cyanus* var. *tian-schanicus* と表記している), その後 Meise によって 1934 年に *Parus* へ移された (Snow 1967). 第7版では *Cyanistes* へ戻したので, 学名の著者を括弧書きにせず, Menzbier, 1884 としている. 原記載は Bulletin de la Société Zoologique de France の第9巻 276 ページにあるが, このページでは *Parus cyanus tianschanicus* Severtzow, 1873 として引用している. この引用元を探すと, Journal für Ornithologie の 1873 年の 347 ページに確かに *Parus cyanus tianschanicus* を確認することができる. したがって一見すると, Menzbier, 1884 は原記載ではないように見えるが, 国際動物命名規約第4版の条 12.1 に, 1931 年よりも前に公表された学名が適格であるための要求として, 「その学名が示すタクソンの記載または定義, もしくは指示が添えられていなければならない」とあり, Severtzow, 1873 はこれを満たしていないために原記載とは認められず, Menzbier が学名の著者となる (Hartert 1905).

また, ルリガラは 1987 年 11 月に利尻島で観察された1例が第6版に記載されており, 第7版ではこれを転載している. ところが, この個体の観察報告では種が同定されているだけで, 亜種について言及していない (小杉 1988). 第6版で *tian-*

schanicus とされた根拠は明確ではなく、極東に分布する (Dement'ev & Gladkov 1954) という理由からこの亜種としたようである (Morioka 2000)。

第7版は分類学上の妥当性は認められるが、*tianschanicus* を日本産亜種の一つとした点で問題がある。亜種不明とするのが妥当である。

(5) エナガ科 Aegithalidae について

466. エナガ *Aegithalos caudatus* (Linnaeus, 1758)

466-1. シマエナガ *Aegithalos caudatus japonicus* Prazák, 1897

第7版は第6版と同じであるが、IOC リストをはじめ、Dickinson & Christidis (2014) も *japonicus* を *caudatus* のシノニムとしている。Dickinson & Christidis (2014) は、この根拠として Morioka (2000) を引用しているが、この文献では実際にはシノニム関係について何も述べていない。Eck & Martens (2006) はむしろ Morioka (2000) を引用して *japonicus* を認めるとしている。

Päckert et al. (2010) は、ミトコンドリア DNA のチトクローム *b* から ND2 に至る領域と 16S リボソーム RNA から tRNA 領域に至る領域、核 DNA の3つの領域を用いて分子系統学的研究を行った。この結果ユーラシアのエナガは2つの系統に分かれた後、分布が再び重なったことなどがわかったが、エナガの系統が2つに分かれた時期が比較的最近のことであり、亜種の違いなどは示されなかった。

エナガ亜種間の系統については十分な情報が無い。少なくとも Päckert et al. (2010) ではサンプルに北海道産のエナガが含まれていないため、*japonicus* を *caudatus* のシノニムとすることはできない (本州の *trivirgatus* と朝鮮半島の *magnus* は含まれている)。

(6) メジロ科 Zosteropidae について

483. メジロ *Apalopteron familiare* (Kittlitz, 1830)

483-1. メジロ *Apalopteron familiare familiare* (Kittlitz, 1830)

第6版では記載年を1831年としているが、第7版と IOC リストでは1830年としている。メジロの原記載は *Mémoires présentés à l'Académie Impériale des Sciences de St. Petersburg par divers Savants et dans ses Assemblées* に掲載されているが、この紀要は第1巻が1830年から1831年にかけて6分冊で発行されている。メジロの原記載があるのは第1巻を構成する第3, 4分冊の235ページであり

(第3, 4が1冊にまとめられた)、この分冊については1830年に発行されているため1830年が正しい。

多くの文献で記載年が間違っているのは、著名な Check-List of Birds of the World: A Continuation of the Work of James L. Peters をそのまま引用した場合が多いためではないかと思われる。このチェックリスト第12巻393ページのメジロの項では、*Ixos familiaris* Kittlitz, 1831, *Mém. Acad. Imp. Sci. St. Pétersbourg*, 1, p. 235, pl. 13 としている (Salomonsen 1967)。これは、引用は正しいのだが、記載年を間違っている。間違った理由は、先に書いたように掲載された巻が1831年に完成しているからだろう。一方、Morioka et al. (2005) は Salomonsen (1967) の引用は記載年以外が間違っているとし、その根拠として Royal Society of London (1869) を参照している。この本はイギリスの王立協会が編集している科学論文目録であるが、667ページに Kittlitz の著書が書かれている。このうちメジロの原記載の論文は以下のように書かれている。

Kittlitz, F. H. von. Ueber die Vögel der Inselgruppe von Boninsima. [1830.] *St. Pétersb. Mém. Savans Étrang. I.*, 1831, pp. 231–248.

年が2回登場するが、この目録の凡例によれば、文献に記された出版年が実際に発行された年と異なる場合、実際に発行された年を括弧書きで書くとしている。したがって Royal Society of London (1869) の表記は、分冊のいくつかが前年に出版されたことと符合する。これを採用するのであれば、Salomonsen (1967) が間違っているのは記載年とすべきだが、Morioka et al. (2005) はこれを逆に指摘している。

485. メジロ *Zosterops japonicus* Temminck & Schlegel, 1845

485-1. メジロ *Zosterops japonicus japonicus* Temminck & Schlegel, 1845

第6版では記載年を1847年としているが、第7版では1845年としている。亜種メジロは日本動物誌の鳥類編57ページ、図版22に記載されており (Morioka et al. 2005)、本文は1847年に出版された分冊3に掲載されているが、これに先行して1845年に図版で掲載されている (Holthuis & Sakai 1970)。したがって第7版と IOC リストの方が正しい。

目録第4版では北海道に生息するメジロは *Z. j. yesoensis* という亜種だとされていたが（日本鳥類目録第4版編集委員 1958）, *yesoensis* は第5版において *japonicus* のジュニアシノニムとされた（Ornithological Society of Japan 1974）. この根拠は、筆者の一人が Udagawa コレクションと Yamashina コレクションで検証した結果、違いはわずかであり、ラベルの採集地を参照せずにこれらの亜種を同定するのは困難であったというものである（Ornithological Society of Japan 1974）. しかし残念ながら、この検証結果は目録第5版の脚注に書かれたのみで、具体的な方法を記述した出版物としては刊行されなかった. 第6版と第7版は第5版を踏襲しただけで、この問題は現在も取り上げられないままである. IOC リストでは *yesoensis* を有効としてリストしているし、その他のチェックリストでも *yesoensis* がリストされている（Dickinson 2003; Clements 2007; Dickinson & Christidis 2014）.

(7) ゴジュウカラ科 Sittidae について

502. ゴジュウカラ *Sitta europaea* Linnaeus, 1758

ゴジュウカラは17–40もの亜種を含むが、これらはヨーロッパから中東に分布する *caesia* グループ、スカンジナビア半島からカムチャツカまでと日本を含むユーラシアに広く分布する *europaea* グループ、おもに中国に分布する *sinensis* グループの3つに分けられる（Harrap & Quinn 1996; Red'kin & Konovalova 2006）.

ミトコンドリア DNA を用いた分子系統学的研究では、ヨーロッパ、コーカサス、および北ヨーロッパからカムチャツカまでのユーラシアの3グループが遺伝的に分化しており（*sinensis* グループは解析に含まれていない）, *S. e. arctica* が他のすべての亜種からなるクレードと姉妹群になることが示された（Zink et al. 2006）.

Red'kin & Konovalova (2006) は、外部形態を用いてアジアの亜種（ウラル山脈以東）を研究し、*arctica* はその他のアジアの亜種とは異なっており、別種とすべきだと主張している. *Sitta arctica* の分布はレナ川からアナディル川までのシベリア北東部で、オホーツク海には達しない（Red'kin & Konovalova 2006）.

ただし、Red'kin & Konovalova (2006) では、*europaea* グループを13亜種に細分化することを主張している. 第7版と IOC リストでは、北海道に *asiatica* が生息するとしているが、Red'kin &

Konovalova (2006) では *clara* であるとしており、同様に第7版と IOC リストで本州、四国、九州北部に生息しているとする *amurensis* に代わって *hondoensis* が生息するとなっている. *asiatica* と *clara*, *amurensis* と *hondoensis* は色彩とサイズがわずかに違うだけで、*hondoensis* は色彩変異の幅が大きいとしている（Red'kin & Konovalova 2006）. Dickinson & Christidis (2014) はこの見解を採用している. 一方、Morioka (1994) は北海道、本州、四国、九州の189標本に朝鮮半島、中国東北部の標本を加えて検証した結果として、北海道産と本州、四国、九州北部産は明らかに異なっており、後者は *amurensis* であるとしている（前者については一般的見解として *asiatica* を採用している）.

第7版における種ゴジュウカラの分布表記では、第6版で「across Siberia」としていた箇所が「across s Siberia」に替わっている（このsは南southを意味する）. 第7版では *arctica* を別種と認めて、*Sitta europaea* の分布から *Sitta arctica* の分布を削除したようである. IOC リストでも *arctica* は別種であり、*asiatica*, *amurensis*, *roseilia* の扱いも第7版と同じである. 第6版に比べれば、第7版と IOC リストの方が妥当であろう. しかし、分子系統学的な根拠が不十分であるため、さらなる研究を待たねばならない.

502-1. シロハラゴジュウカラ *Sitta europaea asiatica* Gould, 1835

第6版では記載年を1837年としているが、第7版と IOC リストでは1835年としている. この亜種は John Gould による *The Birds of Europe* の図版236に記載されている（Greenway 1967）. この本は分冊で発行されており、1832年6月から年に4冊、1冊につき20図版が含まれ、1837年まで刊行された. 図版の刊行スケジュールから、図版236は1835年3月発行の分冊に掲載されているとわかる（本文も同時掲載；Sauer 1982）. したがって、記載年は1835年が正しい. *The Birds of Europe* が1837年に完成したため、誤ってこの年を引用してきたようである（例えば Greenway 1967）.

(8) キバシリ科 Certhiidae について

503. キバシリ *Certhia familiaris* Linnaeus, 1758

第6版では、キバシリは全北区に分布するとしているが、第7版と IOC リストでは分布域を旧北区のみとしている. *Certhia* に属する7種のミトコ

ンドリア DNA チトクローム *b* 領域を用いた分子系統学的研究によれば、新北区に生息する *C. americana* はヨーロッパに生息する *C. brachydactyla* と共に単系統になり、*C. familiaris* はヒマラヤから中国南西部に生息する *C. hodgsoni* と共に単系統となって前者の姉妹群となった (Tietze et al. 2006). 第7版と IOC リストはこの研究を反映したものと考えられる。

(9) ムクドリ科 Sturnidae について

505. ギンムクドリ *Spodiopsar sericeus* (Gmelin, 1789)

第6版は日本産ムクドリ科をすべて *Sturnus* としているが、第7版と IOC リストはそれらを4属に分けている。

ムクドリ類は形態学や生態学的な観点から長らく *Sturnus* や *Acridotheres* を含む5属にまとめられていたが、属の境界線については再評価が必要とされていた (Zuccon et al. 2006). 核 DNA の3遺伝子座とミトコンドリア DNA の2遺伝子座を使って、*Sturnus*, *Acridotheres*, *Leucopsar*, *Fregilupus*, *Creatophora* のすべての種について分子系統樹を再構築した結果、ギンムクドリは *Spodiopsar sericeus* とすることが提唱された (Zuccon et al. 2008). 第7版と IOC リストはこの研究を反映したものと考えられる。

第6版はギンムクドリの記載年を1788年としているが、第7版と IOC リストは1789年としている。原記載は *Systema naturae per regna tria naturae: secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis* の第1巻の805ページにある。この本の表紙には1788年発行と書かれているが、第1巻は7分冊になっており、1792年までかけて出版されている。805ページは第2分冊に相当し、1789年に出版されているため、1789年が正しい (Hopkinson 1907). 1788年と誤って引用されていることが多いが (例えば Amadon 1962), この誤りは第1巻の表紙に由来するものと思われる。

506. ムクドリ *Spodiopsar cineraceus* (Temminck, 1835)

ムクドリは第6版では *Sturnus* であったが、第7版と IOC リストでは *Spodiopsar* とされた。No. 505 のギンムクドリと同じく、Zuccon et al. (2008) に対応していると考えられる。

507. シベリアムクドリ *Agropsar sturninus* (Pallas, 1776)

シベリアムクドリは第6版では *Sturnus* であった。分子系統学的研究によれば、シベリアムクドリ *Sturnus sturninus* はコムクドリ *S. philippensis* とともに単系統となり、ホオジロムクドリ *S. contra* とクビワムクドリ *S. nigricollis* からなる単系統群と姉妹群となる (Lovette et al. 2008 [ミトコンドリア DNA の5遺伝子座を用いている]; Zuccon et al. 2008). Lovette et al. (2008) ではこれら4種を *Agropsar* とすることを主張している。一方、Zuccon et al. (2008) の見解では、*Agropsar* はシベリアムクドリとコムクドリのみであり、ホオジロムクドリとクビワムクドリは *Gracupica* としている。第7版では *Agropsar* となっており、これらの研究を反映したものと考えられる。IOC リストではホオジロムクドリとクビワムクドリを *Gracupica* としており、Zuccon et al. (2008) を採用している。

508. コムクドリ *Agropsar philippensis* (Forster, 1781)

コムクドリは第6版では *Sturnus* であったが、第7版と IOC リストでは *Agropsar* とされた。No. 507 のシベリアムクドリと同じく、第7版では Lovette et al. (2008), あるいは Zuccon et al. (2008) に対応していると考えられ、IOC リストでは Zuccon et al. (2008) に対応している。

509. カラムクドリ *Sturnia sinensis* (Gmelin, 1788)

カラムクドリは第6版で *Sturnus* とされた。しかし前述の通り、ムクドリ類については系統樹の再構築が試みられ、Zuccon et al. (2008) は *Sturnia* とすることを提唱した。一方、Lovette et al. (2008) は、Zuccon et al. (2008) が *Sturnia*, *Sturnornis*, *Leucopsar* と分けたものを1つの *Temenuchus* とすることを提唱している。第7版と IOC リストでは *Sturnia* となっており、Zuccon et al. (2008) の見解を採用していると考えられる。ムクドリ科に関して、第7版もまた IOC リストと同様、Zuccon et al. (2008) の見解を一貫して採用しているとみなせる。

(10) スズメ科 Passeridae について

568. ニュウナイスズメ *Passer rutilans* (Temminck, 1836)

568-1. ニュウナイスズメ *Passer rutilans rutilans* (Temminck, 1836)

第6版は記載年を1835年としているが、第7版

と IOC リストは 1836 年としている。ニュウナイスズメは Temminck が著した *Nouveau recueil des planches coloriées d'oiseaux* に記載されているが、この本は 1820 年から 1839 年にかけて 102 分冊で出版された。この本の図版は当初 1 分冊につき 6 図版という形で出版される予定であったが、結果的に予定通りに発行されなかったため、現在でもいつ出版されたのかという議論が続いている (Dickinson 2001)。Dickinson (2001) は、これらの図版の出版年について考察しており、補遺 III において著名な鳥類リストである Check-List of Birds of the World で誤りのある鳥種の一覧を掲載している。これに従えば、ニュウナイスズメは分冊 99 に掲載されており、その出版年は 1836 年となる。第 7 版や IOC リストはこれに基づいて記載年を 1836 年としたと考えられる。

現在一般に認められている同種別亜種に *P. r. cinnamomeus* (Gould, 1836) があるが、Mlíkovský (2011) によるとこれを記載した文献は 1836 年 4 月 8 日に出版された。一方、*rutilans* は上記の通り 1836 年に出版されたが、出版された月日は不明のままである。国際動物命名規約第 4 版の条 21.3 と 21.7 から、月日が特定できない場合は 12 月 31 日を採用することとなる。したがって、*rutilans* よりも *cinnamomeus* の公表の方が古いこととなり、先取権は *cinnamomeus* にある。

これらのことから、一般的に認められているニュウナイスズメの 3 亜種の学名は *Passer cinnamomeus rutilans* (Temminck, 1836), *P. cinnamomeus intensior* Rothschild, 1922, *P. cinnamomeus cinnamomeus* (Gould, 1836) のように綴るのが正しい (Mlíkovský 2011)。

(11) アトリ科 Fringillidae について

587. カワラヒワ *Chloris sinica* (Linnaeus, 1766)

第 6 版ではカワラヒワは *Carduelis* とされていたが、ミトコンドリア DNA のチトクローム *b* 領域を用いた分子系統学的研究によれば、*Carduelis* は単系統とはならなかった (Arnaiz-Villena et al. 1998, 2008)。このことから、Chesser et al. (2009) や Sangster et al. (2011) はカワラヒワを含む系統を *Chloris* とすることを提唱している。第 7 版と IOC リストでは *Chloris* となっており、この見解を採用していると考えられる。

587-1. オオカワラヒワ *Chloris sinica kawarahiba* (Temminck, 1836)

第 6 版では記載年を 1835 年としているが、第 7 版と IOC リストでは 1836 年としている。オオカワラヒワは No. 568 のニュウナイスズメと同様に Temminck が著した *Nouveau recueil des planches coloriées d'oiseaux* の分冊 99 に記載されており、その出版年は 1836 年が正しい (Dickinson 2001)。

また、種カワラヒワでの説明の通り、第 6 版は *Carduelis* としていたが、第 7 版と IOC リストは Chesser et al. (2009) や Sangster et al. (2011) の見解と一致して *Chloris* としている。

587-2. カワラヒワ *Chloris sinica minor* (Temminck & Schlegel, 1848)

種カワラヒワでの説明の通り、第 6 版は *Carduelis* としていたが、第 7 版と IOC リストは Chesser et al. (2009) や Sangster et al. (2011) の見解と一致して *Chloris* としている。

587-3. オガサワラカワラヒワ *Chloris sinica kittlitzii* (Seeböhm, 1890)

種カワラヒワでの説明の通り、第 6 版は *Carduelis* としていたが、第 7 版と IOC リストは Chesser et al. (2009) や Sangster et al. (2011) の見解と一致して *Chloris* としている。

588. マヒワ *Carduelis spinus* (Linnaeus, 1758)

第 6 版と第 7 版でマヒワは *Carduelis* とされているが、ミトコンドリア DNA のチトクローム *b* 領域を用いた分子系統学的研究によれば、*Carduelis* は単系統とはならなかった (Arnaiz-Villena et al. 1998, 2008)。このことから Chesser et al. (2009) はマヒワを含む系統を *Spinus* とすることを提唱している。IOC リストは *Spinus* としており、この見解を採用していると考えられる。

第 7 版ではカワラヒワを *Chloris* としたことから Chesser et al. (2009) の見解を採用していると考えられる一方で、マヒワを *Carduelis* としているため、見解が一致していない。第 7 版は分類の見直しが不徹底と言える。

589. ベニヒワ *Carduelis flammea* (Linnaeus, 1758)

589-1. ベニヒワ *Carduelis flammea flammea* (Linnaeus, 1758)

第 6 版と第 7 版では *Carduelis* となっているが、No. 588 のマヒワで説明した通り、*Carduelis* は単

系統とはならなかった (Arnaiz-Villena et al. 1998, 2008). このことから Chesser et al. (2009) はベニヒワを含む系統を *Acanthis* とすることを提唱している. IOC リストは *Acanthis* としており, この見解を採用していると考えられる一方, 第7版ではカワラヒワを *Chloris* としたことで符合せず, 分類の見直しが不徹底と言える.

590. コベニヒワ *Carduelis hornemanni* (Holböhl, 1843)

第6版と第7版では *Carduelis* となっているが, Arnaiz-Villena et al. (1998, 2008) によれば, コベニヒワはベニヒワと共に単系統となるので, *Acanthis* とすべきである (Chesser et al. 2009). IOC リストは *Acanthis* となっており, この見解を採用していると考えられる一方, 第7版ではカワラヒワを *Chloris* としたことで符合せず, 分類の見直しが不徹底と言える.

590-1. コベニヒワ *Carduelis hornemanni exilipes* (Coues, 1862)

種コベニヒワで説明した通り, 第6版と第7版では *Carduelis* となっているが, IOC リストに採用された *Acanthis* とすべきである.

591. ハギマシコ *Leucosticte arctoa* (Pallas, 1811)

第6版ではハギマシコの世界分布に新北區を含めている. これはもともと別種扱いであった新北區の近縁種を, Vaurie (1956) や Mayr & Short (1970) の見解に沿って同種とみなしたものと思われる. しかし, ミトコンドリア DNA の制限酵素断片長を用いた研究によると, 旧北区と新北區のハギマシコ間ではベーリング海を挟んで遺伝距離が大きく (ただし, *L. arctoa pustulata* と *L. a.* (または *tephrocotis*) *littoralis* 間の比較のみ; Zink et al. 1995), 現在では新北區に生息する亜種を別種とする考え方が主流である (American Ornithologists' Union 1993; Dickinson 2003; Clements 2007; Clement & Arkhipov 2010). 第7版では新北區に生息する亜種を別種とみなしているらしく, 世界分布に新北區を含めていない. また, IOC リストは第7版と同じ見解である.

592. ベニマシコ *Uragus sibiricus* (Pallas, 1773)

第6版と第7版では *Uragus* とされている. しかし, Zuccon et al. (2012) によると, ミトコンドリア DNA の2遺伝子と核 DNA の3遺伝子に基づい

てアトリ科全体の分子系統樹を構築された結果, 属の境界が大きく見直され, ベニマシコを *Carpodacus* とすることが提唱された.

第7版ではこの研究成果が採用されておらず, IOC リストではこの研究成果が反映されて *Carpodacus sibiricus* とされている.

592-1. ベニマシコ *Uragus sibiricus sanguinolentus* (Temminck & Schlegel, 1848)

種ベニマシコで説明された通り, 第6版と第7版では *Uragus* とされているが, IOC リストでは Zuccon et al. (2012) の見解を採用して *Carpodacus* としている.

593. オガサワラマシコ *Chaunoproctus ferreorostris* (Vigors, 1829)

第6版では *Chaunoproctus* としているが, Zuccon et al. (2012) によるアトリ科の系統に関する研究で, オガサワラマシコは *Carpodacus* とすることが提唱された.

第7版ではこの研究成果が採用されておらず, IOC リストではこの研究成果が反映されて *Carpodacus ferreorostris* とされている.

597. イスカ *Loxia curvirostra* Linnaeus, 1758

597-1. イスカ *Loxia curvirostra japonica* Ridgway, 1884

第6版は記載年を1885年としているが, 第7版とIOC リストは1884年としている. 亜種イスカは *Proceedings of the Biological Society of Washington* の第2巻103ページに原記載があり, これは1884年に出版されているため (Morioka et al. 2005), 1884年が正しい.

598. ナキイスカ *Loxia leucoptera* Gmelin, 1789

第6版では, ナキイスカは全北区に加えて, 西インド諸島のイスパニョーラ島に隔離個体群があるとしている. しかし, 羽色や声の研究では, イスパニョーラ島の個体群 (*megaplaga*) は北アメリカの個体群 (*leucoptera*) とは明らかに異なっており (Smith 1997), 別種とみなされるようになった (Banks et al. 2003). のちにミトコンドリア DNA チトクローム *b* 領域の塩基配列から構築された系統樹では, 統計学的に弱い支持ながら *L. megaplaga* は北アメリカに生息する *L. l. leucoptera* よりもむしろユーラシアに生息する *L. l. bifasciata* に近いという結果であった (Parchman et al. 2007). 現在

では *L. megaplaga* を別種扱いとするのが主流である (Clements 2007; Parkin & Knox 2010; Dickinson & Christidis 2014). 第7版では、ナキイスカの分布にイスパニョーラ島が含まれておらず、これらの研究を反映したものと考えられる. IOC リストでも *L. megaplaga* は別種扱いである.

(12) ホオジロ科 *Emberizidae* について

617. カシラダカ *Emberiza rustica* Pallas, 1776

617-1. カシラダカ *Emberiza rustica latifascia* Portenko, 1930

第6版と第7版では、日本に生息する亜種を *latifascia* としているが、IOC リストではカシラダカを亜種に分けず、単形種としている. この亜種の扱いは見解が分かれており、Vaurie (1959) や Paynter (1970) は認めているが、Dement'ev & Gladkov (1954) と Stepanyan (1990) は *rustica* のジュニアシノニムとしており、Dickinson (2003) と Dickinson & Christidis (2014) は Stepanyan (1990) に従ってカシラダカを単形種としている. Byers et al. (1995) と Copete (2011) は2亜種を認めるときもある、というはっきりしない立場をとっている. 現状ではこれらを解決する分子系統学的研究などは行われていない.

618. ミヤマホオジロ *Emberiza elegans* Temminck, 1836

618-1. ミヤマホオジロ *Emberiza elegans elegans* Temminck 1836

第6版は記載年を1835年としているが、第7版とIOC リストは1836年としている. 亜種ミヤマホオジロはNo. 568のニュウナイスズメと同様に Temminck が著した *Nouveau recueil des planches coloriées d'oiseaux* に記載されているが、掲載ページは分冊98となる. 分冊98の出版年は1836年が正しい (Dickinson 2001).

624. アオジ *Emberiza spodocephala* Pallas, 1776

624-2. アオジ *Emberiza spodocephala personata* Temminck, 1836

第6版は記載年を1835年としているが、第7版とIOC リストは1836年としている. 亜種アオジはNo. 618のミヤマホオジロと同様に Temminck が著した *Nouveau recueil des planches coloriées d'oiseaux* の分冊98に記載されており、その出版年は1836年が正しい (Dickinson 2001).

625. クロジ *Emberiza variabilis* Temminck, 1836

第6版は記載年を1835年としているが、第7版とIOC リストは1836年としている. クロジはNo. 618のミヤマホオジロと同様に Temminck が著した *Nouveau recueil des planches coloriées d'oiseaux* の分冊98に記載されており、その出版年は1836年が正しい (Dickinson 2001).

第6版と第7版はクロジを単形種としているが、IOC リストでは *musica* という亜種を認めている. 筆者らは原記載を確認できていないが、*musica* は Kittlitz が1858年に記載したカムチャツカ半島の個体群である. その後、京都で11月に採られた個体をホロタイプとして、初山が1927年に *kurodai* という亜種も記載した (初山 1927). これらの亜種の扱いについては見解が分かれており、日本鳥学会 (1932) と Dement'ev & Gladkov (1954) は *musica*, *kurodai* とともに *variabilis* のジュニアシノニムとしており、Vaurie (1959) や Byers et al. (1995) もクロジを単形種扱いしている. また、Paynter (1970) と山階 (1933) は *kurodai* を *variabilis* のジュニアシノニムとしているものの、*musica* についての言及はない. Dickinson (2003) と Dickinson & Christidis (2014) は Stepanyan (1990) に従って *musica* を認め、*kurodai* は認めていない. いずれの場合も *kurodai* は認められていない. 現状ではこれらを解決する分子系統学的研究などは行われていない.

626. シベリアジュリン *Emberiza pallasi* (Cabanis, 1851)

626-1. シベリアジュリン *Emberiza pallasi polaris* Middendorff, 1853

第6版は記載年を1851年としているが、第7版とIOC リストは1853年としている. 亜種シベリアジュリンの記載者である Alexander Theodor von Middendorff は1843年と1844年に極東シベリアを探検し、その成果を *Reise in den äussersten Norden und Osten Sibiriens* (『極北地域と東シベリアの旅』) として、1848年から1875年にかけてオーストリア科学アカデミーより出版した. シベリアジュリンはこの一連の出版物のうち、第2巻第2号の *Säugethiere, Vögel und Amphibien* の146ページに記載されているが、この号の出版は1853年である (Tammiksaar & Stone 2007). 1851年という誤りがあるのは、同じ巻の第1号が1851年に出版されているためと思われる.

629. ゴマフスズメ *Passerella iliaca* (Merrem, 1786)

北アメリカに広く分布するゴマフスズメは羽色などから4つの亜種グループに分かれるとされていたが、ミトコンドリアDNAによる研究により、4つのグループが遺伝的にも支持されることがわかった (Zink 1994; Zink & Weckstein 2003). しかし、限定的ながら交雑が認められるため、生物学的種概念を厳密に当てはめるとこれら4グループをそれぞれ別種と認めることはできなかった. マイクロサテライト分析による遺伝子流動の研究でも明白に分けることはできなかったが (Zink 2008), IOC リストではこれらの研究に基づいて4グループを別種と認め、それぞれ *Passerella iliaca*, *P. unalaschcensis*, *P. schistacea*, *P. megarhyncha* とした. 一方で、Dickinson & Christidis (2014) はこれらを1種とみなしている. 第6版、第7版も分布をアラスカからカナダ、南はカリフォルニアまでとしているので1種とみなしている.

629-1. ゴマフスズメ *Passerella iliaca unalaschcensis* (Gmelin, 1789)

種ゴマフスズメで説明した通り、第6版と第7版では、*Passerella iliaca* とされているが、IOC リストでは *P. unalaschcensis* とされている.

日本で記録されたゴマフスズメは1935年に栃木県で捕獲された個体と、1985年に北海道で観察された個体の2例があり、前者は *unalaschcensis* と同定されたが、後者の同定根拠はわかっていない (日本産鳥類記録委員会 2008).

ま と め

検討対象となった154タクサのうち、第6版と第7版で相違があったのは50タクサ (32%) であった (付表1を参照). また、第7版とIOC リストで相違があったのは25タクサ (16%) であった (付表2を参照). 第7版は概ね分子系統学的研究を反映しているとみなせるが、後述の通り問題点も多くある.

第7版が明らかに間違っているのはニューナイスズメで、これは系統分類学の成果によるものではなく、先取権の問題である. 国際動物命名規約第4版にしたがうと *Passer cinnamomeus* が有効となる. 今後、*Fringilla rutilans* Temminck, 1836 (原記載では *Fringilla*) の原記載が1836年4月7日以前に公表されたと判明しない限り、*Passer cinnamomeus* が有効である.

アトリ科について、第7版には間違いが多い. Arnaiz-Villena et al. (1998, 2008) の成果に基づいてカワラヒワを第6版の *Carduelis* から *Chloris* と改めているにもかかわらず、同じ研究で属名の変更が主張されているマヒワ、ベニヒワ、コベニヒワの属名については第6版のままとしており、一貫性がない. あえて、Arnaiz-Villena et al. (1998, 2008) の研究を採用しない可能性もあるが、そうであればカワラヒワを *Carduelis* から *Chloris* に改めた理由ははっきりしなくなる. Zuccon et al. (2012) については第7版出版に間に合わなかったと思われるが、この研究でも Arnaiz-Villena et al. (1998, 2008) が支持されており、さらにベニマシコとオガサワラマシコの系統関係が明らかにされている.

Zuccon らの研究のように分子系統学は現在急速に進んでいるため、概ね妥当と考えられた第7版におけるシジュウカラ科の学名も、Johansson et al. (2013) や McKay et al. (2014) によって既に古いものとなった. 今後はオーストンヤマガラ、オリヤマガラが別種扱いされるようになるかもしれない.

一方カラス類 (*Corvus*) の場合、分子系統学的研究がチェックリストにあまり反映されていないようである. Parkin et al. (2003) はハシボソガラスの *corone* グループと *cornix* グループを別種扱いすることを主張しているが、旧来の *corone* グループと *cornix* グループという分け方は、分子系統学の観点からは支持されない (Haring et al. 2007, 2012; Kryukov et al. 2012). 分子系統学的研究の結果では、ハシボソガラスは東西に分布する2つのクレードに分かれるが、東のグループはロシア極東部、カムチャツカ半島南端、日本、中国南東部に分布し、それ以外はすべて西のグループになる (Haring et al. (2012) の Fig. 5 がわかりやすい). また、これらの一連の研究により、コクマルガラスとニシコクマルガラスを含むクレードは単系統となり、その他の *Corvus* と姉妹群となることがわかっているが、研究結果に基づいた分類はまだ提唱されておらず、コクマルガラスとニシコクマルガラスを *Coloeus* として別属扱いすることは提唱されていない. Dickinson & Christidis (2014) は旧来のリストを変更していないし、IOC リストで *Coloeus* を採用した理由は形態分類に基づいている.

カササギの場合も分子系統学の結果がチェックリストに反映されていないが、Lee et al. (2003)

の場合は *Corvus* の研究と違って、*Pica nutalli* と *P. hudsonia* を *P. pica* の亜種とすべきであると明白に主張している。それにもかかわらず、多くのチェックリストが新北区の個体群を別種扱いしているため（例えば、Dickinson 2003; Clements 2007; Parkin & Knox 2010; Dickinson & Christidis 2014）、第7版とIOCリストは単に趨勢にしたがっただけなのかもしれない。

ムクドリ科については、同時期に Lovette et al. (2008) と Zuccon et al. (2008) の2つの研究があって属が再編された。第7版はカラムクドリを *Sturnia* としていることから、Zuccon et al. (2008) を採用したとみなせるが理由は明らかではない。第7版が採用した分類はIOCリストと合致しており、ムクドリ科の場合も、研究の妥当性ではなく、趨勢に従おうとしただけなのかもしれない。

研究者の立場の違いから分類が異なる場合もある。ゴマフスズメの場合、Zink (1994) は生物学的種概念を厳密に当てはめれば18亜種を含む1種とみなさざるを得ないが、系統学的種概念に照らしてむしろ4つの亜種グループをそれぞれ別種とみなすべきだと主張している。この主張を、IOCリストは取り入れ、第7版や Dickinson & Christidis (2014) などは取り入れなかったということだろう。

ツリスガラ、エナガ、カシラダカ、クロジは第6版と第7版で違いはないものの、第7版とIOCリストの間で違いがあった。これらも研究者間の見解の相違と言えよう。これらの種ではいずれも分子系統学的研究が進んでおらず、本稿の観点からは是非を問えない。カシラダカとクロジの亜種については記述が少なく、形態上の違いや分布境界などもはっきりしていない。

上記の議論とまったく異質なのはモリツバメである。モリツバメは第7版とIOCリストの間に齟齬はなかったものの、この学名が正しいかどうか結論できなかった。一方で、Dickinson & Christidis (2014) は訂正されなければならない原綴りではないとして *Artamus leucorhynchus* を採用している。しかし、長らく用いられてきた学名は第6版で採用された *A. leucorhynchus* か、第7版とIOCリストで採用された *A. leucorhynchus* である。理屈通りならば、Dickinson & Christidis (2014) が正しいと言えるが、学名の安定性が覆ることにもなる。

また異なる観点であるが、第6版では記載年の間違いが多かった。チェックリストを参照する際には、記載年について頻繁に改訂しているチェッ

クリストほど参照する価値があると言える。記載年の間違いが生じる理由はほぼ2通りで、1つ目は、本文と図版が別の年に出版されたというものである。2つ目は、1つの本が分冊で年を隔てて出版されたもので、該当種／亜種の記載ページを含むのはどの分冊なのか調べなければならない。記載年について詳細に論じた文献と合致しているか、原記載論文を確認することで第7版とIOCリストが正しいと確認できた。

学名の妥当性とは離れてしまうが、日本産鳥類の分類について一言述べる。カケスとメジロについて本文で言及したが、日本産鳥類の中には日本国内で多数の亜種に細分化された後に、第7版までにそのいくつかは別亜種のシノニムとして抹消されてきたものがある。その一方で、IOCリストや Dickinson & Christidis (2014) ではこれらが今でも有効であるとされている。しかし、これらの判断基準になる研究が十分にされているとは思えない。少なくとも分子系統学の研究はない。日本産鳥類のうち、複数の亜種があるものの系統関係に関する研究が進んでいないものはまだ多くある。今後の研究によっては大きく再編される可能性もある。

第6版では日本産鳥類として掲載されておらず、第7版から新規に掲載された種／亜種を除くと、本稿で行われたのと同じ検証が必要なタクサは859ある。本稿で検証されたのは154タクサであり、全体の18%にすぎない。スズメ目の他科や非スズメ目についても同様に検証することが今後の課題である。また、目、科といった高次分類も第7版から大きく改訂されたが、これらがどのような研究を根拠にしているかについても検証する必要がある。

貴重なコメントをいただいた編集委員と2名の査読者に感謝いたします。

摘 要

2012年に発行された最新の日本鳥類目録改訂第7版で採用された学名と分類について、スズメ目の15科に含まれる154タクサを対象に、日本鳥類目録改訂第6版と世界鳥類リスト（IOCリスト）との相違点に注目して最新の分子系統学の観点から検証した。この結果、第6版と相違があったのは50タクサであり、IOCリストと相違があったのは25タクサであった。第7版は概ね分子系統学的研究を反映しているとみなせたが、マヒワ、ベニ

ヒワ、コベニヒワ、ハシボソガラス、カササギについては分子系統学研究の結果を反映しているとは言えなかった。マヒワ、ベニヒワ、コベニヒワはそれぞれ *Spinus spinus*, *Acanthis flammea*, *Acanthis hornemanni* とされるべきである。ハシボソガラスの亜種境界には議論の余地があり、カササギとその近縁種間の分類は再検討の余地がある。ヤマガラ、ベニマシコ、オガサワラマシコについては第7版出版以降の研究によって別の学名が提唱されており、それぞれの属名は *Sittiparus*, *Carpodacus*, *Carpodacus* とすることが提唱されている。ヤマガラについては2つの亜種が種として扱われるようになるかもしれない。分類学上の問題ではないが、ニュウナイスズメの学名は先取権の原則から *Passer cinnamomeus* とされるべきである。モリツバメの学名の正しい綴りについては、国際動物命名規約の不備によって結論が出せないままとなった。日本鳥類目録は、版を重ねる過程でいくつかのタクサをシノニムとして抹消してきたが、その根拠となる研究が十分にされているとは言えず、今後の研究によってまた大きく再編される可能性もある。

引用文献

- Amadon D (1962) Family Sturnidae. In: Mayr E & Greenway Jr. JC (eds) *Check-List of Birds of the World: A Continuation of the Work of James L. Peters, Volume XV*: 75–121. Museum of Comparative Zoology, Cambridge.
- American Ornithologists' Union (1993) Thirty-ninth supplement to the American Ornithologists' Union Check-List of North American Birds. *Auk* 110: 675–682.
- American Ornithologists' Union (2000) Forty-second supplement to the American Ornithologists' Union Check-List of North American Birds. *Auk* 117: 847–858.
- Arnaiz-Villena A, Álvarez-Tejado M, Ruíz-del-Valle V, García-de-la-Torre C, Varela P, Recio MJ, Ferre S & Martínez-Laso J (1998) Phylogeny and rapid Northern and Southern Hemisphere speciation of goldfinches during the Miocene and Pliocene Epochs. *Cell Mol Life Sci* 54: 1031–1041.
- Arnaiz-Villena A, Moscoso J, Ruiz-del-Valle V, Gonzalez J, Reguera R, Ferri A, Wink M & Serrano-Vela JI (2008) Mitochondrial DNA phylogenetic definition of a group of 'arid-zone' Carduelini finches. *Open Ornithol J* 1: 1–7.
- Banks RC, Cicero C, Dunn JL, Kratter AW, Rasmussen PC, Remsen Jr. JV, Rising JD, & Stotz DF (2003) Forty-fourth supplement to the American Ornithologists' Union Check-List of North American Birds. *Auk* 120: 923–931.
- Blake ER & Vaurie C (1962) Family Corvidae. In: Mayr E & Greenway Jr. JC (eds) *Check-list of Birds of the World: A Continuation of the Work of James L. Peters, Volume XV*: 204–282. Museum of Comparative Zoology, Cambridge.
- Brazil M (2009) *Birds of East Asia: China, Taiwan, Korea, Japan, and Russia*. Princeton University Press, Princeton.
- Byers C, Olsson U & Curson J (1995) *Buntings and Sparrows: A Guide to the Buntings and North American Sparrows*. Pica Press, East Sussex.
- Chesser RT, Banks RC, Barker FK, Cicero C, Dunn JL, Kratter AW, Lovette IJ, Rasmussen PC, Remsen Jr. JV, Rising JD, Stotz DF & Winker K (2009) Fiftieth supplement to the American Ornithologists' Union Check-List of North American birds. *Auk* 126: 705–714.
- Clement P & Arkhipov VY (2010) 88. Asian Rosy-finch. In: del Hoyo J, Elliott A & Christie DA (eds) *Handbook of the Birds of the World. Vol 15. Weavers to New World Warblers*: 572–573. Lynx Edicions, Barcelona.
- Clements JF (2007) *The Clements Checklist of the Birds of the World. Sixth Edition*. Christopher Helm, London.
- Copete JL (2011) 32. Rustic Bunting. In: del Hoyo J, Elliott A & Christie DA (eds) *Handbook of the Birds of the World. Vol 16. Tanagers to New World Blackbirds*: 525. Lynx Edicions, Barcelona.
- David N & Dickinson EC (2014) Changes in the spellings of scientific names: Vol. 2. In: Dickinson EC & Christidis L (eds) *The Howard & Moore Complete Checklist of the Birds of the World. 4th Edition, Vol 2: Appendix 8*. Aves Press, Eastbourne.
- David N & Gosselin M (2002) Gender agreement of avian species names. *Bull B O C* 122: 14–49.
- David N & Gosselin M (2012) The correct gender of *Poecile* and the scientific name of the Willow Tit. *Brit Birds* 105: 36.
- Dement'ev GP & Gladkov NA (eds) (1954) *Birds of the Soviet Union, Volume V*. Israel Program for Scientific Translations, Jerusalem.
- Dickinson EC (2001) Systematic notes on Asian birds. 9. The "Nouveau recueil de planches coloriées" of Temminck & Laugier (1820–1839). *Zool Verh Leiden* 335: 7–53.
- Dickinson EC (ed) (2003) *The Howard & Moore Complete Checklist of the Birds of the World. 3rd Edition*. Princeton University Press, Princeton, New Jersey.
- Dickinson EC & Christidis L (2014) *The Howard & Moore Complete Checklist of the Birds of the World. 4th Edition, Vol 2*. Aves Press, Eastbourne.
- Dickinson EC, Eck S & Martens J (2004) Systematic notes on Asian birds. 44. A preliminary review of the Corvidae. *Zool Verh Leiden* 350: 85–109.
- Eck S & Martens J (2006) Systematic notes on Asian birds. 49. A preliminary review of the Aegithalidae, Remizidae and Paridae. *Zool Med Leiden* 80: 1–63.
- Gill F & Donsker D (eds) (2015) IOC World Bird List (v 5.3) (online) <http://www.worldbirdnames.org>, accessed 2015–7–29.
- Gill FB, Slikas B & Sheldon FH (2005) Phylogeny of titmice (Paridae): II. Species relationships based on sequences of the mitochondrial cytochrome-b gene. *Auk* 122: 121–143.
- Greenway Jr. JC (1967) Family Sittidae. In: Paynter Jr. RA (ed) *Check-List of Birds of the World: A Continuation of the Work of James L. Peters, Volume XII*: 125–149. Museum of Comparative Zoology, Cambridge.

- Haring E, Däubl B, Pinsker W, Kryukov A & Gamauf A (2012) Genetic divergences and intraspecific variation in corvids of the genus *Corvus* (Aves: Passeriformes: Corvidae) — a first survey based on museum specimens. *J Zool Syst Evol Res* 50: 230–246.
- Haring E, Gamauf A & Kryukov A (2007) Phylogeographic patterns in widespread corvid birds. *Mol Phylogenet Evol* 45: 840–862.
- Harrap S & Quinn D (1996) *Tits, Nuthatches & Treecreepers*. Christopher Helm, London.
- Hartert E (1905) *Die Vögel der paläarktischen Fauna, Systematische Übersicht der in Europa, Nord-Asien und der Mittelmeerregion vorkommenden Vögel, Heft III*. Verlag von R. Friedländer und Sohn, Berlin.
- Holthuis LB & Sakai T (1970) *Ph. F. Von Siebold and Fauna Japonica — A history of early Japanese zoology —*. Academic Press of Japan, Tokyo.
- Hopkinson J (1907) Dates of publication of the separate parts of Gmelin's edition (13th) of the "Systema Naturae" of Linnaeus. *Proc Zool Soc London* 1907: 1035–1036.
- Johansson US, Ekman J, Bowie RCK, Halvarsson P, Ohlson JI, Price TD & Ericson PGP (2013) A complete multilocus species phylogeny of the tits and chickadees (Aves: Paridae). *Mol Phylogenet Evol* 69: 852–860.
- 小杉和樹 (1988) 日本におけるルリガラスの初記録. *Strix* 7: 297–298.
- Kryukov A, Iwasa MA, Kakizawa R, Suzuki H, Pinsker W & Haring E (2004) Synchronic east-west divergence in azure-winged magpies (*Cyanopica cyanus*) and magpies (*Pica pica*). *J Zool Syst Evol Research* 42: 342–351.
- Kryukov A, Spiridonova L, Nakamura S, Haring E & Suzuki H (2012) Comparative phylogeography of two crow species: jungle crow *Corvus macrorhynchos* and carrion crow *Corvus corone*. *Zool Sci* 29: 484–492.
- Kryukov A & Suzuki H (2000) Phylogeography of carrion, hooded, and jungle crows (aves, Corvidae) inferred from partial sequencing of the mitochondrial DNA cytochrome b gene. *Russian J Genet* 36: 1111–1118 (in Russian with English Abstract).
- Kvist L, Martens J, Ahola A & Orell M (2001) Phylogeography of a Palaearctic sedentary passerine, the willow tit (*Parus montanus*). *J Evol Biol* 14: 930–941.
- Kvist L, Martens J, Higuchi H, Nazarenko AA, Valchuk OP & Orell M (2003) Evolution and genetic structure of the great tit (*Parus major*) complex. *Proc R Soc Lond B* 270: 1447–1454.
- Lee S, Parr CS, Hwang Y, Mindell DP & Choe JC (2003) Phylogeny of magpies (genus *Pica*) inferred from mtDNA data. *Mol Phylogenet Evol* 29: 250–257.
- Lovette IJ, McCleery BV, Talaba AL & Rubenstein DR (2008) A complete species-level molecular phylogeny for the "Eurasian" starlings (*Sturnidae: Sturnus, Acridotheres*, and allies): Recent diversification in a highly social and dispersive avian group. *Mol Phylogenet Evol* 47: 251–260.
- Madge SC (2009) 65. Common Magpie. In: del Hoyo J, Elliott A & Christie DA (eds), *Handbook of the Birds of the World. Vol 14. Bush-shrikes to Old World Sparrows*: 604–605. Lynx Edicions, Barcelona.
- Madge S & Burn H (1994) *Crows and Jays: A Guide to the Crows, Jays and Magpies of the World*. Christopher Helm, London.
- Mayr E (1962) Family Artamidae. In: Mayr E & Greenway Jr. JC (eds) *Check-list of Birds of the World: A Continuation of the Work of James L. Peters, Volume XV*: 160–165. Museum of Comparative Zoology, Cambridge.
- Mayr E & Short LL (1970) *Species taxa of North American Birds: A Contribution to Comparative Systematics*. The Nuttall Ornithological Club, Cambridge.
- McKay BD, Mays Jr. HL, Yao C, Wan D, Higuchi H & Nishiumi I (2014) Incorporating color into integrative taxonomy: analysis of the varied tit (*Sittiparus varius*) complex in East Asia. *Syst Biol* 63: 505–517.
- Mlikovský J (2011) Correct name for the Asian Russet Sparrow. *Chinese Birds* 2: 109–110.
- 杉山徳太郎 (1927) 日本産新鳥類 (1). 東亞鳥學彙報 1: 1–80.
- Momiyama T (1939) A new race of jay from Izu Peninsula. *Zoological Magazine* 51: 380.
- 森岡弘之 (1976) 鳥類から見た屋久島の生物地理的地位. 国立科博専報 (9): 163–171.
- Morioka H (1994) Subspecific status of certain birds breeding in Hokkaido. *Mem Natn Sci Mus, Tokyo* (27): 163–173.
- Morioka H (2000) Appendix C: Taxonomic Notes on Passerine Species By Hiroyuki Morioka. In: Committee for Check-List of Japanese Birds (ed), *Check-List of Japanese Birds, Sixth Revised Edition*: 291–325. The Ornithological Society of Japan, Obihiro.
- Morioka H, Dickinson EC, Hiraoka T, Allen D & Yamasaki T (2005) Types of Japanese Birds. *Natl Sci Mus Monogr* (28): 1–154.
- 日本鳥学会 (編) (1922) 日本鳥類目録. 日本鳥学会, 東京.
- 日本鳥学会 (1932) 改訂日本鳥類目録. 日本鳥学会, 東京.
- 日本鳥学会 (編) (1942) 日本鳥類目録 (改訂三版). 日本鳥学会, 東京.
- 日本鳥学会 (2012) 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.
- 日本鳥学会目録編集委員会 (1997) 日本産鳥類リスト. 日鳥学誌 46: 59–91.
- 日本鳥類目録第4版編集委員 (編) (1958) 日本鳥類目録 (改訂四版). 日本鳥学会, 東京.
- 日本鳥類目録編集委員会 (2000) 日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広.
- 日本産鳥類記録委員会 (2008) 日本産鳥類記録リスト (9). 日鳥学誌 57: 165–170.
- 大久保憲秀 (2006) 動物学名の仕組み 国際動物命名規約第4版の読み方. 伊藤印刷出版部, 津.
- Ornithological Society of Japan (1974) *Check-List of Japanese Birds, Fifth and Revised Edition*. Gakken Co., Ltd., Tokyo.
- Päckert M & Martens J (2008) Taxonomic pitfalls in tits — comments on the Paridae chapter of the Handbook of the

- Birds of the World. Ibis 150: 829–831.
- Päckert M, Martens J, Eck S, Nazarenko AA, Valchuk OP, Petri B & Veith M (2005) The great tit (*Parus major*) — a misclassified ring species. Biol J Linn Soc 86: 153–174.
- Päckert M, Martens J & Sun Y-H (2010) Phylogeny of long-tailed tits and allies inferred from mitochondrial and nuclear markers (Aves: Passeriformes, Aegithalidae). Mol Phyl Evol 55: 952–967.
- Parchman TL, Benkman CW & Mezquida ET (2007) Coevolution between Hispaniolan crossbills and pine: Does more time allow for greater phenotypic escalation at lower latitude? Evolution 61: 2142–2153.
- Parkin DT, Collinson M, Helbig AJ, Knox AG & Sangster G (2003) The taxonomic status of Carrion and Hooded Crows. Brit Birds 96: 274–290.
- Parkin DT & Knox AG (2010) *The Status of Birds in Britain and Ireland*. Christopher Helm, London.
- Paynter Jr. RA (1970) Subfamily Emberizinae. In: Paynter Jr. RA (ed) *Check-List of Birds of the World: A Continuation of the Work of James L. Peters, Volume XIII*: 3–212. Museum of Comparative Zoology, Cambridge.
- Peterson AP (online) Zoonomen: Zoological Nomenclature Resource. <http://www.zoonomen.net/>, accessed 2013–5–31.
- Red'kin Y & Konovalova M (2006) Systematic notes on Asian birds. 63. The eastern Asiatic races of *Sitta europaea* Linnaeus, 1758. Zool Med Leiden 80: 241–261.
- Rowley ICR & Russell EM (2009) Family Artamidae (Woodswallows). In: del Hoyo J, Elliott A & Christie DA (eds) *Handbook of the Birds of the World. Vol 14. Bush-shrikes to Old World Sparrows*: 286–307. Lynx Edicions, Barcelona.
- Royal Society of London (1869) *Catalogue of Scientific Papers (1800–1863), Vol III*. Royal Society of London, London.
- Salomonsen F (1967) Family Meliphagidae. In: Paynter Jr. RA (ed) *Check-List of Birds of the World: A Continuation of the Work of James L. Peters, Volume XII*: 338–450. Museum of Comparative Zoology, Cambridge.
- Salzburger W, Martens J, Nazarenko AA, Sun Y-H, Dallinger R & Sturmbauer C (2002) Phylogeography of the Eurasian Willow Tit (*Parus montanus*) based on DNA sequences of the mitochondrial cytochrome *b* gene. Mol Phylogenet Evol 24: 26–34.
- Sangster G, Collinson JM, Crochet P-A, Knox AG, Parkin DT, Svensson L & Votier SC (2011) Taxonomic recommendations for British birds: seventh report. Ibis 153: 883–892.
- Sauer GC (1982) *John Gould — The Bird Man — : A Chronology and Bibliography*. Henry Sotheran Limited, London.
- Smith PW (1997) The history and taxonomic status of the Hispaniolan Crossbill *Loxia megalaga*. Bull B O C 117: 264–271.
- Snow DW (1967) Family Paridae. In: Paynter Jr. RA (ed) *Check-List of Birds of the World: A Continuation of the Work of James L. Peters, Volume XII*: 70–123. Museum of Comparative Zoology, Cambridge.
- Stepanyan LS (1990) *Conspectus of the Ornithological Fauna of the USSR*. Sokolov VE (ed) Moscow Nauka, Moscow (in Russian).
- Tammiksaar E & Stone IR (2007) Alexander von Middendorff and his expedition to Siberia (1842–1845). Polar Record 43: 193–216.
- Tietze DT, Martens J & Sun Y-H (2006) Molecular phylogeny of treecreepers (*Certhia*) detects hidden diversity. Ibis 148: 477–488.
- Vaurie C (1956) Systematic notes on Palearctic birds, no. 20. Fringillidae: The genera *Leucosticte*, *Rhodopechys*, *Carpodacus*, *Pinicola*, *Loxia*, *Uragus*, *Urocynchramus* and *Propyrrhula*. Am Mus Novit 1786: 1–37.
- Vaurie C (1957) Systematic notes on Palearctic birds. No. 27 Paridae: the genera *Parus* and *Sylviparus*. Amer Mus Novit 1852: 1–43.
- Vaurie C (1959) *The Birds of the Palearctic Fauna. Order Passeriformes*. H F & G Witherby, London.
- 山階芳麿 (1933) 日本の鳥類と其の生態 第一巻. 梓書房, 東京.
- Zink RM (1994) The geography of mitochondrial DNA variation, population structure, hybridization, and species limits in the fox sparrow (*Passerella iliaca*). Evolution 48: 96–111.
- Zink RM (2008) Microsatellite and mitochondrial DNA differentiation in the Fox Sparrow. Condor 110: 482–492.
- Zink RM, Drovetski SV & Rohwer S (2006) Selective neutrality of mitochondrial ND2 sequences, phylogeography and species limits in *Sitta europaea*. Mol Phylogenet Evol 40: 679–686.
- Zink RM, Rohwer S, Andreev AV & Dittmann DL (1995) Trans-Beringia comparisons of mitochondrial DNA differentiation in birds. Condor 97: 639–649.
- Zink RM & Weckstein JD (2003) Recent evolutionary history of the Fox Sparrows (genus: *Passerella*). Auk 120: 522–527.
- Zuccon D, Cibois A, Pasquet E & Ericson PGP (2006) Nuclear and mitochondrial sequence data reveal the major lineages of starlings, mynas and related taxa. Mol Phylogenet Evol 41: 333–344.
- Zuccon D, Pasquet E & Ericson PGP (2008) Phylogenetic relationships among Palearctic-Oriental starlings and mynas (genera *Sturnus* and *Acridotheres*: Sturnidae). Zoologica Scripta 37: 469–481.
- Zuccon D, Prÿs-Jones R, Rasmussen PC & Ericson PGP (2012) The phylogenetic relationships and generic limits of finches (Fringillidae). Mol Phylogenet Evol 62: 581–596.

付表 1. 第 7 版と第 6 版の相違点.
Appendix 1. Differences between the 6th and 7th editions of the Check-List of Japanese Birds.

科 Family	第 7 版 The 7th edition			第 6 版 The 6th edition		
	種／ 亜種番号 Species/ subspecies No.	種／亜種和名 Japanese name	学名 Scientific name	種／ 亜種番号 Species/ subspecies No.	学名 Scientific name	
Artamidae	410	モリソバメ	<i>Artamus leucorhynchus</i> (Linnaeus, 1771)	532	<i>Artamus leucorhynchus</i> (Linnaeus, 1771)	
Corvidae	427-2	カケス	<i>Garrulus glandarius japonicus</i> Temminck & Schlegel, 1847	533-2	<i>Garrulus glandarius japonicus</i> Temminck & Schlegel, 1848	
Corvidae	429	オナガ	<i>Cyanopica cyanus</i> (Pallas, 1776)	535	<i>Cyanopica cyana</i> (Pallas, 1776)	
Corvidae	429-1	オナガ	<i>Cyanopica cyanus japonica</i> Parrot, 1905	535-1	<i>Cyanopica cyana japonica</i> Parrot, 1905	
Corvidae	430	カササギ	<i>Pica pica</i> (Linnaeus, 1758)	536	<i>Pica pica</i> (Linnaeus, 1758)*	
Corvidae	430-1	カササギ	<i>Pica pica sericea</i> Gould, 1845	536-1	<i>Pica pica sericea</i> Gould, 1845	
Corvidae	435	ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i> Linnaeus, 1758	540	<i>Corvus corone</i> Linnaeus, 1758*	
Paridae	440	ハシブトガラ	<i>Poecile palustris</i> (Linnaeus, 1758)	470	<i>Parus palustris</i> Linnaeus, 1758	
Paridae	440-1	ハシブトガラ	<i>Poecile palustris hensoni</i> (Stejneger, 1892)	470-1	<i>Parus palustris hensoni</i> Stejneger, 1892	
Paridae	441	コガラ	<i>Poecile montanus</i> (Conrad von Balenstein, 1827)	471	<i>Parus montanus</i> Conrad von Balenstein, 1827	
Paridae	441-1	カラフトコガラ	<i>Poecile montanus sachalinensis</i> (Lönnerberg, 1908)	471-1	<i>Parus montanus sachalinensis</i> Lönnerberg, 1908	
Paridae	441-2	コガラ	<i>Poecile montanus restrictus</i> (Hellmayr, 1900)	471-2	<i>Parus montanus restrictus</i> Hellmayr, 1900	
Paridae	442	ヤマガラ	<i>Poecile varius</i> (Temminck & Schlegel, 1845)	473	<i>Parus varius</i> Temminck & Schlegel, 1848	
Paridae	442-2	ナミエヤマガラ	<i>Poecile varius namiyai</i> (Kuroda, 1918)	473-2	<i>Parus varius namiyai</i> Kuroda, 1918	
Paridae	442-3	オーストンヤマガラ	<i>Poecile varius owstoni</i> (Ijima, 1893)	473-3	<i>Parus varius owstoni</i> Ijima, 1893	
Paridae	442-4	ダイトウヤマガラ	<i>Poecile varius orii</i> (Kuroda, 1923)	473-4	<i>Parus varius orii</i> (Kuroda, 1923)	
Paridae	442-5	タネヤマガラ	<i>Poecile varius sunsumpi</i> (Kuroda, 1919)	473-5	<i>Parus varius sunsumpi</i> Kuroda, 1919	
Paridae	442-6	ヤクシヤマガラ	<i>Poecile varius yakushimensis</i> (Kuroda, 1919)	473-6	<i>Parus varius yakushimensis</i> Kuroda, 1919	
Paridae	442-7	アマミヤマガラ	<i>Poecile varius amamii</i> (Kuroda, 1922)	473-7	<i>Parus varius amamii</i> (Kuroda, 1922)	
Paridae	442-8	オリイヤマガラ	<i>Poecile varius olivaceus</i> (Kuroda, 1923)	473-8	<i>Parus varius olivaceus</i> (Kuroda, 1923)	
Paridae	443	ヒガラ	<i>Periparus ater</i> (Linnaeus, 1758)	472	<i>Parus ater</i> Linnaeus, 1758	
Paridae	443-1	ヒガラ	<i>Periparus ater insularis</i> (Hellmayr, 1902)	472-1	<i>Parus ater insularis</i> Hellmayr, 1902	
Paridae	445	シジュウカラ	<i>Parus minor</i> Temminck & Schlegel, 1848	475	<i>Parus major</i> Linnaeus, 1758	
Paridae	445-2	アマミシジュウカラ	<i>Parus minor amamiensis</i> Kleinschmidt, 1922	475-2	<i>Parus major amamiensis</i> Kleinschmidt, 1922	
Paridae	445-3	オキナワシジュウカラ	<i>Parus minor okinawae</i> Hartert, 1905	475-3	<i>Parus major okinawae</i> Hartert, 1905	
Paridae	445-4	イシガキシジュウカラ	<i>Parus minor nigriloris</i> Hellmayr, 1900	475-4	<i>Parus major nigriloris</i> Hellmayr, 1900	
Paridae	446	ルリガラ	<i>Cyanistes cyanus</i> (Pallas, 1770)	474	<i>Parus cyanus</i> Pallas, 1770	
Paridae	446-1	ルリガラ	<i>Cyanistes cyanus tianschanicus</i> Menzbier, 1884	474-1	<i>Parus cyanus tianschanicus</i> (Menzbier, 1884)	
Zosteropidae	483	メグロ	<i>Apalopteron familiare</i> (Kittlitz, 1830)	479	<i>Apalopteron familiare</i> (Kittlitz, 1831)	
Zosteropidae	485	メジロ	<i>Zosterops japonicus</i> Temminck & Schlegel, 1845	478	<i>Zosterops japonicus</i> Temminck & Schlegel, 1847	

付表 1. つづき.
Appendix 1. continued.

科 Family	第7版 The 7th edition		第6版 The 6th edition	
	種／ 亜種番号 Species/ subspecies No.	種／亜種和名 Japanese name	種／ 亜種番号 Species/ subspecies No.	学名 Scientific name
Sittidae	502	ゴジュウカラ	476	<i>Sitta europaea</i> Linnaeus, 1758*
Sittidae	502-1	シロハラゴジュウカラ	476-1	<i>Sitta europaea asiatica</i> Gould, 1837
Certhiidae	503	キバシリ	477	<i>Certhia familiaris</i> Linnaeus, 1758*
Sturnidae	505	ギンムクドリ	525	<i>Sturnus sericeus</i> Gmelin, 1788
Sturnidae	506	ムクドリ	530	<i>Sturnus cineraceus</i> Temminck, 1835
Sturnidae	507	シベリアムクドリ	526	<i>Sturnus sturninus</i> (Pallas, 1776)
Sturnidae	508	コムクドリ	527	<i>Sturnus philippensis</i> (Forster, 1781)
Sturnidae	509	カラムクドリ	528	<i>Sturnia sinensis</i> (Gmelin, 1788)
Passeridae	568	ニユウナイスズメ	523	<i>Passer rutilans</i> (Temminck, 1836)
Fringillidae	587	カワラヒワ	506	<i>Chloris sinica</i> (Linnaeus, 1766)
Fringillidae	587-1	オオカワラヒワ	506-1	<i>Chloris sinica kawaraha</i> (Temminck, 1836)
Fringillidae	587-2	カワラヒワ	506-2	<i>Chloris sinica minor</i> (Temminck & Schlegel, 1848)
Fringillidae	587-3	オガサワラカワラヒワ	506-3	<i>Chloris sinica kitlitzii</i> (Seeborn, 1890)
Fringillidae	591	ハギマシコ	510	<i>Leucosticte arctoa</i> (Pallas, 1811)*
Fringillidae	597-1	イスカ	514-1	<i>Loxia curvirostra japonica</i> Ridgway, 1885
Fringillidae	598	ナキイスカ	515	<i>Loxia leucoptera</i> Gmelin, 1789*
Emberizidae	618	ミヤマホオジロ	490	<i>Emberiza elegans</i> Temminck, 1835
Emberizidae	624-2	アオジ	495-2	<i>Emberiza spodocephala personata</i> Temminck, 1835
Emberizidae	625	クロジ	496	<i>Emberiza variabilis</i> Temminck, 1835
Emberizidae	626-1	シベリアジユリン	497-1	<i>Emberiza pallasi polaris</i> Middendorff, 1853

* 学名等の表記に違いはないが、採用された分類の違いに伴って分布表記が異なっている。

* Distributions are different due to adopted taxonomy between the 7th and 6th editions, although the scientific names do not differ.

付表2. 第7版とIOC リストの相違点.
Appendix 2. Differences between Check-List of Japanese Birds 7th edition, and IOC list v5.3.

科 Family	第7版 The 7th edition		IOC List v5.3	
	種／ 亜種番号 Species/ subspecies No.	種／亜種和名 Japanese name	学名 Scientific name	学名 Scientific name
Corvidae	433	コクマルガラス	<i>Corvus dauuricus</i> Pallas, 1776	<i>Coloeus dauuricus</i> (Pallas, 1776)
Remizidae	439	ソリスガラ	<i>Remiz pendulinus</i> (Linnaeus, 1758)*1	
Remizidae	439-1	ソリスガラ	<i>Remiz pendulinus consobrinus</i> (Swinhoe, 1870)	<i>Remiz consobrinus</i> (Swinhoe, 1870)
Paridae	442	ヤマガラ	<i>Poecile varius</i> (Temminck & Schlegel, 1845)	<i>Sittiparus varius</i> (Temminck & Schlegel, 1845)
Paridae	442-1	ヤマガラ	<i>Poecile varius varius</i> (Temminck & Schlegel, 1845)	<i>Sittiparus varius varius</i> (Temminck & Schlegel, 1845)
Paridae	442-2	ナミエヤマガラ	<i>Poecile varius namiyai</i> (Kuroda, 1918)	<i>Sittiparus varius namiyai</i> (Kuroda, 1918)
Paridae	442-3	オーストンヤマガラ	<i>Poecile varius owstoni</i> (Ijima, 1893)	<i>Sittiparus owstoni</i> (Ijima, 1893)
Paridae	442-4	ダイトウヤマガラ	<i>Poecile varius orii</i> (Kuroda, 1923)	<i>Sittiparus varius orii</i> Kuroda, 1923
Paridae	442-5	タネヤマガラ	<i>Poecile varius sunsunpi</i> (Kuroda, 1919)	<i>Sittiparus varius sunsunpi</i> (Kuroda, 1919)
Paridae	442-6	ヤクシヤマガラ	<i>Poecile varius yakushimensis</i> (Kuroda, 1919)	<i>Sittiparus varius sunsunpi</i> (Kuroda, 1919)
Paridae	442-7	アマミヤマガラ	<i>Poecile varius amamii</i> (Kuroda, 1922)	<i>Sittiparus varius amamii</i> Kuroda, 1922
Paridae	442-8	オリイヤマガラ	<i>Poecile varius olivaceus</i> (Kuroda, 1923)	<i>Sittiparus olivaceus</i> Kuroda, 1923
Aegithalidae	466-1	シマエナガ	<i>Aegithalos caudatus japonicus</i> Prazák, 1897	<i>Aegithalos caudatus caudatus</i> (Linnaeus, 1758)
Fringillidae	588	マヒワ	<i>Carduelis spinus</i> (Linnaeus, 1758)	<i>Spinus spinus</i> (Linnaeus, 1758)
Fringillidae	589	ベニヒワ	<i>Carduelis flammea</i> (Linnaeus, 1758)	<i>Acanthis flammea</i> (Linnaeus, 1758)
Fringillidae	589-1	ベニヒワ	<i>Carduelis flammea flammea</i> (Linnaeus, 1758)	<i>Acanthis flammea flammea</i> (Linnaeus, 1758)
Fringillidae	590	コベニヒワ	<i>Carduelis hornemanni</i> (Holböll, 1843)	<i>Acanthis hornemanni</i> (Holböll, 1843)
Fringillidae	590-1	コベニヒワ	<i>Carduelis hornemanni exilipes</i> (Coe, 1862)	<i>Acanthis hornemanni exilipes</i> (Coe, 1862)
Fringillidae	592	ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i> (Pallas, 1773)	<i>Carpodacus sibiricus</i> (Pallas, 1773)
Fringillidae	592-1	ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus sanguinolentus</i> (Temminck & Schlegel, 1848)	<i>Carpodacus sibiricus sanguinolentus</i> (Temminck & Schlegel, 1848)
Fringillidae	593	オガサワラマシコ	<i>Chaunoproctus ferreorostris</i> (Vigors, 1829)	<i>Carpodacus ferreorostris</i> (Vigors, 1829)
Emberizidae	617-1	カシラダカ	<i>Emberiza rustica latifascia</i> Portenko, 1930*2	
Emberizidae				<i>Emberiza variabilis musica</i> (Kittlitz, 1858)*3
Emberizidae	629	ゴマフスズメ	<i>Passerella iliaca</i> (Merrem, 1786)	<i>Passerella unalaschensis</i> (Gmelin, 1789)
Emberizidae	629-1	ゴマフスズメ	<i>Passerella iliaca unalaschensis</i> (Gmelin, 1789)	<i>Passerella unalaschensis unalaschensis</i> (Gmelin, 1789)

*1 IOC リストでは, *Remiz pendulinus* は4種に分けられ, 日本には *R. consobrinus* が分布するとされた.

*1 In the IOC list, *Remiz pendulinus* has been split into four species; *R. consobrinus* is considered to occur in Japan.

*2 IOC リストでは, 単形種として扱われている.

*2 In the IOC list, *Emberiza rustica* is treated as monotypic.

*3 IOC リストでは多形種として扱われているが, 第7版では単形種として扱われている.

*3 In the 7th edition, *Emberiza variabilis* is treated as monotypic although it is treated as polytypic in the IOC list.